埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第243集

秩父郡大滝村

浜平岩陰／入波沢西／入波沢東

滝沢ダム建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告

2000

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

入波沢西遺跡 遠景

入波沢西遺跡　廃屋墓（第９号住居跡）

入波沢東遺跡 遠景

入波沢東遺跡 遺物出土状況（第１号配石遺構）

縄文時代後期の土器（入波沢西遺跡　第１号土壙）

縄文時代後期の土器（入波沢東遺跡　第１号配石遺構）

序

近年、首都圏においては、急激な都市化に伴う生活用水の需要と、産業の発展に伴う工業用水の需要の増大により、慢性的な水不足の状態にあります。

従来、荒川水系では、豊富な地下水を生活用水にあてていましたが、すでに地下水だけでは水需要の飛躍的な増大に対応できない情勢にあり、そればかりか、過剰な地下水の汲み上げは、広範囲の地盤沈下という新たな問題を引き起こしつつあります。

こうした事態に対応すべく、現在、荒川・利根川の流域において、数多くのダム建設事業が推進されつつあります。

秩父郡大滝村の中津川流域に建設中の滝沢ダムは、荒川水系治水計画の中にあって、浦山ダム・二瀬ダム等と並ぶいわゆる「上流ダム群」のひとつです。

完成時には、有効貯水容量5800万立方メートルという荒川水系で最大の貯水能力により、安定的な生活・工業用水の供給を期待されています。また、ダムからの放流水を利用して、最大出力3,400KWの発電事業も計画されています。

平成9年・10年に実施された文化財保護課による分布調査の結果、滝沢ダム湛水後に水没する地域内に、三つの遺跡が存在することが判明しました。

その取り扱いについては、関係機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、当事業団が水資源開発公団の委託を受け、実施しました。

発掘調査の結果、縄文時代早期末～前期初頭の岩陰遺跡と、縄文時代後期の二つの集落跡が発見されました。

集落跡からは配石遺構と呼ばれる石造の施設が多数発見されました。中でも縄文時代の石棺墓は、これまで埼玉県内ではほとんど調査されておらず、今後の調査・研究を進めるうえで、貴重な資料となることでしょう。

これらの成果をまとめたものが本書であります。埋蔵文化財の保護、教育普及さらに学術研究の資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、水資源開発公団、同滝沢ダム建設所、大滝村教育委員会ならびに地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成12年3月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　荒井　桂

例言

1．本書は、埼玉県秩父郡大滝村大字大滝に所在する浜平岩除遺跡（略称 HMDIRIWKG）・入波沢西遺跡（NPPZWNS）・入波沢東遺跡（NPPZWHGS）の報告書である。

2．遺跡の略称は、発掘調査時の遺跡のコード番号である。

［49－16］（浜平岩除遺跡）

［49－17］（入波沢西遺跡）

［49－18］（入波沢東遺跡）

を用いている。

3．発掘調査は、滝沢ダム建設に伴う事前調査である。埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整のもと、水資源開発公団の委託により財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．発掘調査は、若松良一・栗島義明・渡辺清志が担当し、平成10年6月1日から平成10年11月30日まで、平成11年8月1日から平成11年9月30日までの二度にわたり実施した。

報告書作成作業は渡辺清志が担当し、石塚香の協力を得て、平成11年10月1日から平成12年3月31日まで実施した。

発掘調査および整理事業の組織は3ページに記した。

5．出土品の整理および図版の作成は渡辺が行った。発掘調査時の写真撮影は若松良一・栗島義明・渡辺清志が行い、遺物の撮影は渡辺が行った。

6．遺跡の基準点測量と航空写真は朝日航洋株式会社に委託した。

分析・鑑定については、黒曜石の原産地同定を第四期地質研究所に委託した。

7．本書の編集は渡辺が担当した。

8．本書に掲載した資料は平成12年4月1日以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

9．本書の執筆はⅠ－1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、それ以外を渡辺が行った。

10．本書の作成にあたり以下の機関・諸氏からご教示・ご指導を賜った。

また、第Ⅱ章の執筆にあたって、大滝中学校から資料の提供を受けた。記して謝意を表します。

（五十音順、敬称略）

浅野晴樹　大滝村教育委員会　菊地伸之　長岡文紀

山本暉久

凡 例

1．本書におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒) に基づく各座標値を示す。また、各挿図における方向指示は、すべて座標北を表す。

2．本書における遺構の表現は、便宜上、下記の略号を表記した部分がある。

ＳＪ：住居跡　　ＳＫ：土壙

ＳＸ：配石遺構（敷石住居跡・列石遺構を除く）

3．遺構番号は、入波沢西遺跡出土のものについて発掘調査時の番号を一部改めた。

住居跡	
ＳＪ１	
ＳＪ２	
ＳＪ３	
ＳＪ４	第２遺物包含層
ＳＪ５	第２遺物包含層
ＳＪ６	ＳＸ11・12 →第５・６号石棺墓
ＳＪ７	
ＳＪ８	抹消
ＳＪ９	
ＳＪ10	
ＳＪ11	第１遺物包含層
ＳＪ12	

配石遺構	
ＳＸ１	ＳＪ９
ＳＸ２	ＳＪ９
ＳＸ３	ＳＪ９
ＳＸ４	
ＳＸ５	
ＳＸ６	
ＳＸ７	第１号石棺墓
ＳＸ８	第２号石棺墓
ＳＸ９	第３号石棺墓
ＳＸ10	第４号石棺墓
ＳＸ11	第５号石棺墓
ＳＸ12	第６号石棺墓

4．遺構・遺物の実測図の縮尺は、原則として下記の通りである。

遺構：住居跡・列石・石垣	1／60
配石遺構・土壙	1／30
土器捨て場	1／80
遺物：縄文時代土器実測図	1／4
縄文時代土器拓影図土製品	1／3
縄文時代石器	
石鏃・石錐	1／1
スクレイパー・石錐	2／3
磨斧・打斧	1／2
石皿・石棒等	1／4
中世陶磁器	1／3
鉄製品	1／3

その他、第Ｉ章の埼玉県の地形図・周辺の遺跡、第III～Ｖ章の遺跡の位置等については、その都度スケールを貼付した。本書に貼付した地形図は、建設省国土地理院発行の1/25000の地形図を使用した。

5．石器の掲載については、実測図の提示は最小限とし、写真による外観および、一覧表形式による計測値の、全個体掲載に主眼を置いた。

一覧表に掲載した石器については、実測図の有無を問わず、すべて整理番号にしたがって遺構単位で保管されている。

また、剥片類については、石材別の点数・重量別グラフを提示した。本遺跡から出土した石器類はこれでほぼすべてである。

なお、石器の分類基準については次ページに提示した。

第１表　石器分類基準一覧表

１．長さ・幅・厚さ：mm　　重量：g　　欠損の場合は（　）付きで表記

２．形　態

石　鏃	A-1	凹基無茎
	A-2	平基無茎
	B-1	凹基有茎
	B-2	平基有茎
	B-3	凸基有茎
	C	尖基
	D	円基
	E	不明

石　錐	A	全体がつまみ部と錐部に分かれる
	B	つまみ部を持たない棒状
	C	不定形の剥片の一端に短い錐部を持つ

スクレイパー	A-1	つまみ有り　片刃		
	A-2	〃　　両刃		
	B-1	つまみ無し　片刃		
	B-2	〃　　両刃		
	縦長剥片		横長剥片	円　形
	a-1	長辺を刃部とする	b-1 長辺を刃部とする	C
	a-2	短辺を刃部とする	b-2 短辺を刃部とする	
	a-3	長短両辺を刃部とする	b-3 長短両辺を刃部とする	

		円　形	楕円形	棒　状
磨　石 敲　石	A-1	片面使用	B-1 片面使用	C
	A-2	両面使用	B-2 両面使用	
	A-3	三面以上使用	B-3 三面以上使用	

		円　形	楕円形	棒　状	穿　孔
凹　石	A-1	片面使用	B-1 片面使用	C	a
	A-2	両面使用	B-2 両面使用		多　孔
	A-3	三面以上使用	B-3 三面以上使用		b

石　錘	A	長軸両端にスリット
	B	長軸一端にスリット
	C	長短軸にスリット
	a	自然礫を使用
	b	自然礫を整形して使用

石　皿	A	楕円形
	B	長方形
	C	不整形
	a	自然礫を使用
	b	自然礫を整形して使用

３．残存度

石　鏃	①	完形	⑤	先端残存
	②	先端欠損	⑥	長軸方向の割裂
	③	基部欠損	⑦	逃し部残存
	④	逃し部欠損	⑧	未成品

石　錐	①	完形	④	錐部両端欠損
	②	錐部先端欠損	⑤	錐部先端残存
	③	つまみ部欠損	⑥	つまみ部残存

磨製石斧 打製石斧	①	完形	④	刃部のみ残存
	②	基部欠損	⑤	基部のみ残存
	③	刃部欠損	⑥	長軸方向の割裂

スクレイパー	①	完形
	②	つまみ部欠損
	③	刃部の一部を欠損
	④	刃部の大半を欠損
	⑤	つまみ周辺のみ残存

石　錐	①	完形
	②	長軸方向に破損
	③	短軸方向に破損
	④	スリットのみ確認可

石　皿	①	完形
	②	長軸方向に破損
	③	短軸方向に破損
	④	使用面のみ確認可

石　棒	①	完形
	②	一端折損
	③	両端折損
	④	長軸方向の割裂

磨　石 敲　石 凹　石	①	完形
	②	折損
	③	表面の剥離
	④	風化による崩壊
	⑤	その他

目次

口絵写真
序
例言
凡例
Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
1　発掘調査に至る経過 …… 1
2　発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 4
Ⅲ　浜平岩陰遺跡 …… 7
1　遺跡の概要 …… 7
2　発見された遺構と遺物 …… 9
(1)　岩陰 …… 9
(2)　出土遺物 …… 11
Ⅳ　入波沢西遺跡 …… 12
1　遺跡の概要 …… 12
2　発見された遺構と遺物 …… 14
1　縄文時代 …… 14
(1)　住居跡 …… 14
(2)　石棺墓 …… 43
(3)　列石遺構 …… 55
(4)　配石遺構 …… 57
(5)　土壙 …… 58
(6)　埋設土器 …… 58
(7)　土器捨て場 …… 60
(8)　グリッド出土遺物 …… 77
2　古代・中・近世 …… 88
(1)　石垣 …… 88
(2)　グリッド出土遺物 …… 89
Ⅴ　入波沢東遺跡 …… 90
1　遺跡の概要 …… 90
2　発見された遺構と遺物 …… 92
1　縄文時代 …… 92
(1)　住居跡 …… 92
(2)　配石遺構 …… 120
Ⅵ　結語 …… 123
Ⅶ　付編 …… 141
入波沢東・西遺跡出土黒曜石の化学分析

挿図目次

第1図　埼玉県の地形図 …… 4
第2図　周辺の遺跡 …… 5
第3図　大滝中学校保管資料 …… 6
第4図　遺跡の位置 …… 7
第5図　浜平岩陰立面・平面図 …… 8
第6図　グリッド配置図 …… 9
第7図　土層断面図(1) …… 10
第8図　土層断面図(2) …… 11
第9図　グリッド出土遺物 …… 11
第10図　遺跡の位置 …… 12
第11図　調査区全体図 …… 13
第12図　第1号住居跡(1) …… 15
第13図　第1号住居跡(2) …… 16
第14図　第1号住居跡遺物分布図 …… 17
第15図　第1号住居跡出土土器(1) …… 17
第16図　第1号住居跡出土土器(2) …… 18
第17図　第1号住居跡出土土器(3) …… 19
第18図　第1号住居跡出土石器 …… 20
第19図　第2号住居跡 …… 21
第20図　第2号住居跡遺物分布図 …… 22
第21図　第2号住居跡出土土器(1) …… 22
第22図　第2号住居跡出土土器(2) …… 23
第23図　第2号住居跡出土石器 …… 24
第24図　第3号住居跡 …… 25

第25図　第３号住居跡遺物分布図 …… 26
第26図　第３号住居跡出土土器(1) …… 26
第27図　第３号住居跡出土土器(2) …… 27
第28図　第７号住居跡 …… 28
第29図　第９号住居跡(1) …… 29
第30図　第９号住居跡(2) …… 30
第31図　第９号住居跡(3) …… 31
第32図　第９号住居跡遺物分布図 …… 32
第33図　第９号住居跡出土土器(1) …… 33
第34図　第９号住居跡出土土器(2) …… 34
第35図　第９号住居跡出土土器(3) …… 35
第36図　第９号住居跡出土石器 …… 36
第37図　第10号住居跡 …… 37
第38図　第10号住居跡遺物分布図 …… 38
第39図　第10号住居跡出土土器 …… 38
第40図　第10号住居跡出土石器 …… 39
第41図　第12号住居跡 …… 40
第42図　第12号住居跡出土土器 …… 41
第43図　第12号住居跡出土石器 …… 42
第44図　第１石棺墓群 …… 43
第45図　第１・２号石棺墓の位置 …… 44
第46図　第１・２号石棺墓 …… 44
第47図　第３号石棺墓の位置 …… 45
第48図　第４号石棺墓の位置 …… 45
第49図　第３号石棺墓 …… 46
第50図　第４号石棺墓 …… 47
第51図　第２石棺墓群 …… 48
第52図　第５号石棺墓の位置 …… 48
第53図　第６号石棺墓の位置 …… 48
第54図　第５号石棺墓 …… 49
第55図　第６号石棺墓 …… 50
第56図　石棺墓群出土土器(1) …… 51
第57図　石棺墓群出土土器(2) …… 52
第58図　石棺墓群出土石器 …… 53
第59図　第１号列石遺構 …… 55
第60図　第３号列石遺構 …… 55
第61図　第２号列石遺構 …… 56
第62図　第４号配石遺構 …… 57
第63図　第４号配石遺構の位置 …… 57
第64図　第５・６号配石遺構 …… 58
第65図　第１・２号土壙および出土土器 …… 59
第66図　第１号埋甕および出土土器 …… 59
第67図　第１遺物包含層 …… 61
第68図　第１遺物包含層遺物分布図(1) …… 62
第69図　第１遺物包含層遺物分布図(2) …… 63
第70図　第１遺物包含層出土土器(1) …… 64
第71図　第１遺物包含層出土土器(2) …… 65
第72図　第１遺物包含層出土土器(3) …… 66
第73図　第１遺物包含層出土土器(4) …… 67
第74図　第１遺物包含層出土土器(5) …… 68
第75図　第１遺物包含層出土土器(6) …… 70
第76図　第１遺物包含層出土土器(7) …… 71
第77図　第１遺物包含層出土土器(8) …… 72
第78図　第１遺物包含層出土土器(9) …… 73
第79図　第１遺物包含層出土土器(10) …… 74
第80図　第１遺物包含層出土石器 …… 76
第81図　グリッド出土土器(1) …… 78
第82図　グリッド出土土器(2) …… 79
第83図　グリッド出土土器(3) …… 80
第84図　グリッド出土土器(4) …… 82
第85図　グリッド出土土器(5) …… 83
第86図　グリッド出土土器(6) …… 84
第87図　グリッド出土土器(7) …… 85
第88図　グリッド出土石器 …… 87
第89図　第１号石垣 …… 88
第90図　古代・中・近世の遺物 …… 89
第91図　遺跡の位置 …… 90
第92図　調査区全体図 …… 91
第93図　第１号住居跡 …… 92
第94図　第１号住居跡出土土器(1) …… 93
第95図　第１号住居跡出土土器(2) …… 94
第96図　第１号住居跡出土石器 …… 95
第97図　第２号住居跡 …… 96
第98図　第２号住居跡出土土器 …… 97

第99図　第２号住居跡出土石器 …… 98
第100図　第３号住居跡 …… 99
第101図　第３号住居跡出土土器 ……100
第102図　第３号住居跡出土石器 ……101
第103図　第４号住居跡 ……102
第104図　第４号住居跡出土土器(1) ……103
第105図　第４号住居跡出土土器(2) ……104
第106図　第４号住居跡出土土器(3) ……105
第107図　第４号住居跡出土土器(4) ……107
第108図　第４号住居跡出土土器(5) ……108
第109図　第４号住居跡出土石器 ……108
第110図　第５号住居跡(1) ……111
第111図　第５号住居跡(2) ……112
第112図　第５号住居跡遺物分布図(1) ……113
第113図　第５号住居跡遺物分布図(2) ……114
第114図　第５号住居跡出土土器(1) ……115
第115図　第５号住居跡出土土器(2) ……116
第116図　第５号住居跡出土土器(3) ……117
第117図　第５号住居跡出土石器 ……118
第118図　第１号配石遺構 ……121
第119図　第１号配石遺構出土土器 ……122
第120図　土器一覧表(1) ……124
第121図　土器一覧表(2) ……125
第122図　参考図版(1) ……130
第123図　参考図版(2) ……133
第124図　参考図版(3) ……135
第125図　参考図版(4) ……137

表目次

第１表　石器分類基準一覧表
第２表　第１号住居跡柱穴一覧表 …… 14
第３表　第１号住居跡石器一覧表…… 20
第４表　第２号住居跡柱穴一覧表…… 21
第５表　第２号住居跡石器一覧表…… 24
第６表　第３号住居跡柱穴一覧表…… 25
第７表　第３号住居跡石器一覧表…… 27
第８表　第９号住居跡柱穴一覧表…… 28
第９表　第９号住居跡石器一覧表…… 36
第10表　第10号住居跡柱穴一覧表 …… 37
第11表　第10号住居跡石器一覧表 …… 39
第12表　第12号住居跡柱穴一覧表 …… 40
第13表　第12号住居跡石器一覧表 …… 42
第14表　石棺墓群石器一覧表 …… 54
第15表　第１遺物包含層石器一覧表(1)…… 75
第16表　第１遺物包含層石器一覧表(2)…… 76
第17表　グリッド石器一覧表(1) …… 86
第18表　グリッド石器一覧表(2) …… 87
第19表　第１号住居跡石器一覧表 …… 95
第20表　第２号住居跡石器一覧表 …… 98
第21表　第３号住居跡石器一覧表 ……101
第22表　第４号住居跡石器一覧表 ……109
第23表　第５号住居跡石器一覧表 ……119

図版目次

図版1　浜平岩陰遺跡遠景
浜平岩陰遺跡遠景
図版2　岩陰全景　南から
岩陰全景　西から
図版3　調査風景
調査区東西断面
調査区南北断面
図版4　入波沢西遺跡遠景
調査開始前の状況　西から
図版5　入波沢西遺跡全景
遺構集中部分
図版6　第1～3号住居跡・第1号列石遺構
第1号住居跡
第1号住居跡　調査風景
図版7　第2号住居跡
第2号住居跡　敷石部分
第3号住居跡
第3号住居跡　敷石部分
第9号住居跡
第9号住居跡　調査風景
図版8　第10号住居跡
第12号住居跡
第1号列石遺構
第2号列石遺構
第1～3号石棺墓
第1石棺墓群　完掘状況
図版9　第1石棺墓群　完掘状況
第1・2号石棺墓
第1・2号石棺墓切り合い部分
図版10　第3号石棺墓　蓋石検出状況
第3号石棺墓
第4号石棺墓　蓋石検出状況
第4号石棺墓
第4号石棺墓　石組み近景
第2石棺墓群　検出状況
図版11　第2石棺墓群　完掘状況
第2石棺墓群　調査風景
第5号石棺墓
第6号石棺墓
第6号配石遺構
図版12　第1・2号土壙
第1号土壙　土器出土状況
第1号埋甕
第4号配石遺構（道路状遺構）
石垣遺構　全景
図版13　入波沢東遺跡遠景
入波沢東遺跡全景
図版14　遺構集中部分
第1号住居跡
第2号住居跡
図版15　第5号住居跡
第5号住居跡張り出し部
第5号住居跡炉周辺
図版16　第3号住居跡
第4号住居跡
第1号配石遺構
第1号配石遺構　置石撤去状況
第1号配石遺構　下部土壙
第1号配石遺構　土器出土状況
図版17　入波沢西第1号住居跡出土土器
入波沢西第10号住居跡出土土器
図版18　入波沢西第1遺物包含層出土土器
入波沢西第1遺物包含層出土土器
図版19　入波沢西第1遺物包含層出土土器
入波沢西第1遺物包含層出土土器
図版20　入波沢西第2号住居跡出土土器
入波沢西第2号住居跡出土土器
入波沢西第9号住居跡出土土器
入波沢西第9号住居跡出土土器
入波沢西第10号住居跡出土土器

入波沢西第10号住居跡出土土器
図版21　入波沢西石棺墓出土土器
入波沢西石棺墓出土土器
入波沢西第１号土壙出土土器
入波沢西第１号埋甕出土土器
入波沢西第１遺物包含層出土土器
図版22　入波沢西第１遺物包含層出土土器
入波沢西第１遺物包含層出土土器
入波沢西第１遺物包含層出土土器
入波沢西第１遺物包含層出土土器
入波沢西第１遺物包含層出土土器
入波沢西第１遺物包含層出土土器
図版23　入波沢西グリッド出土土器
入波沢西グリッド出土土器
図版24　入波沢西グリッド出土土器
入波沢西グリッド出土土器
入波沢西グリッド出土土器
入波沢西グリッド出土土器
入波沢西グリッド出土土器
入波沢西グリッド出土土器
図版25　入波沢東第１号住居跡出土土器
入波沢東第４号住居跡出土土器
図版26　入波沢東第５号住居跡出土土器
入波沢東第５号住居跡出土土器
図版27　入波沢東第１号住居跡出土土器
入波沢東第５号住居跡出土土器
入波沢東第５号住居跡出土土器
入波沢東第５号住居跡出土石器
入波沢東第１号配石遺構出土土器
入波沢東第１号配石遺構出土土器
図版28　入波沢西第12号住居跡出土石棒
入波沢西グリッド出土石皿
図版29　入波沢西第１号住居跡出土石器
入波沢西第１・２号住居跡出土石器
入波沢西第１号住居跡出土石器
入波沢西第９号住居跡出土石器
入波沢西第９号住居跡出土石器
入波沢西第10号住居跡出土石器
図版30　入波沢西第12号住居跡出土石器
入波沢西第１遺物包含層出土石器
入波沢西第１遺物包含層出土石器
入波沢西第１遺物包含層出土石器
入波沢西第４号石棺墓出土石器
入波沢西第４号石棺墓出土石器
図版31　入波沢西グリッド出土石器
入波沢西グリッド出土石器
入波沢西グリッド出土石器
入波沢東第１号住居跡出土石器
入波沢東第１号住居跡出土石器
入波沢東第２号住居跡出土石器
図版32　入波沢東第３号住居跡出土石器
入波沢東第４号住居跡出土石器
入波沢東第４号住居跡出土石器
入波沢東第４号住居跡出土石器
入波沢東第５号住居跡出土石器
入波沢東第５号住居跡出土石器

Ⅰ　発掘調査の概要

1　発掘調査に至る経過

埼玉県を代表する荒川は、県中央部と都心を貫流しており、流域の経済や環境に多大な影響を及ぼしている。首都圏における人口の増加、産業の発展に伴う水需要の増加は著しく、このような背景のもとに建設省・水資源開発公団により滝沢ダムの建設が計画された。県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

平成８年12月10日付８滝二用第28号で水資源開発公団滝沢ダム建設所長より、事業予定地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて照会を受けた。文化財保護課では、滝沢ダム建設により水没する地域について平成９年１月23・24日に所在確認調査を行い、平成９年１月28日付教文第1397号で概ね以下のような回答を行った。

1　埋蔵文化財の所在

事業地内には次の埋蔵文化財包蔵地が所在します。

名称	種別	時代	所在地
入波沢西	集落跡	縄文	秩父郡大滝村大字浜平字入波沢地内
浜平岩陰	集落跡	縄文	秩父郡大滝村大字浜平地内

2　取り扱いについて

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存するのが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合には、事前に文化財保護法第57条の３の規定による発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

なお、発掘調査の実施については、当課と別途協議してください。

さらに平成10年10月７日及び11月26・27日に追加調査を行い、入波沢西遺跡に隣接して入波沢東遺跡が確認され、平成10年10月12日付け教文第873号、平成10年12月３日付け教文第1068号でその旨回答した。

これを受けて文化財保護課と水資源開発公団との間で事前協議がなされたが、計画変更が不可能であるため、水没地域に所在する埋蔵文化財包蔵地について記録保存の措置を講ずることとした。

発掘調査については財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団・水資源開発公団・文化財保護課の三者により、調査方法・期間・経費等についての協議が行われた。調査は平成10年度は浜平岩陰と入波沢西遺跡が平成10年６月１日から11月30日まで、平成11年度は入波沢東遺跡が平成11年８月１日から９月30日まで実施された。

なお、発掘調査届に対する指示通知番号は、次のとおりである

（平成10年度）

浜平岩陰遺跡

平成10年７月21日付け　教文第２-70号

入波沢西遺跡

平成10年７月21日付け　教文第２-71号

（平成11年度）

入波沢東遺跡

平成11年７月15日付け　教文第２-52号

（文化財保護課）

2　発掘調査・報告書作成の経過

(1)　発掘調査

浜平岩陰遺跡

発掘調査は平成10年6月1日から平成10年7月31日まで実施した。

6月初旬、人力による周囲の樹木の伐採を行い、重機により土置き場および作業道路の確保を行った。6月上旬、重機により表土の除去を行い、基準点測量を実施した。

6月中旬から作業員による遺物包含層の掘り下げを開始。作業の妨げとなる落石については、小型の重機によって適宜撤去した。

7月中旬には掘削作業をほぼ完了。土層断面と周辺地形の記録および個別写真の撮影を行う。

7月下旬にはすべての器材を撤収、重機で崩落の危険のある部分の養生を行った。11月中旬、空中写真測量を実施。調査を完了した。

入波沢西遺跡

発掘調査は平成10年8月1日から平成10年11月30日まで実施した。

8月初旬、人力により樹木を伐採し、作業道路を確保した。8月上旬、重機による表土除去を行い、作業員による遺構精査を開始した。極端な傾斜地形、台風を含む天候不良から、表土除去には通常の倍近い期間が費やされた。

8月中旬、遺構の掘削を開始。基準点測量を実施。また、害獣防除用の囲柵工事を実施した。

9月に入ると天候は回復し、以後、遺構調査は順調に進んだ。10月下旬、住居跡群の調査をほぼ完了、土器捨て場の調査を開始した。

11月中旬、空中写真測量を実施。撮影終了後、配石を撤去する過程で石棺墓群を発見。

11月下旬、すべての遺構・遺物の記録作業を完了。器材の撤収を行い、発掘調査を終了した。

入波沢東遺跡

発掘調査は平成11年8月1日から平成11年9月30日まで実施した。

8月初旬、人力により樹木を伐採し、重機による表土除去を開始した。調査区の北縁は工事用道路路肩の斜面であり、やや不安定な状態であったので、人力により斜面の養生を行った。

8月上旬、作業員による遺構調査を開始する。

8月14日から同15日にかけて、「弱い熱帯低気圧」による豪雨の影響により、東日本の広い範囲で災害・事故が続発。中津川往還の県道も随所で落石や土砂崩れの被害が発生し、発掘作業も約一週間の中止をやむなくされた。

9月中旬、住居跡群の調査を完了し、空中写真撮影を実施した。9月下旬、すべての遺構の記録作業を完了、器材を撤収し、調査を終了した。

(2)　整理・報告書作成

整理作業は平成11年10月1日から平成12年3月31日まで実施した。

10月上旬から遺物の水洗・注記を行い、図面・写真の整理を行った。10月中旬から遺物の復元を行い、復元された遺物は順次図化を行った。また、石器の分類・計測作業を行った。

11月上旬から遺構図版のトレースと版組みを開始。11月中旬には復元作業を終了し、遺物のトレースを開始した。また、拓影図用の遺物のピックアップを行い、拓本の採取に入った。

12月に入って原稿の執筆を開始。

1月上旬に遺物の写真撮影を実施、写真図版の編集を行った。1月中旬までに図版が一通り完成し、最終的な編集作業に入った。

1月下旬に入札を実施。2月の校正作業を経て、3月下旬に報告書を刊行した。

3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1)　**発掘調査**（平成10・11年度）

理事長	荒井　桂
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	鈴木　進(H10)
	広木　卓(H11)

管理部

専門調査員兼経理課長	関野英一(H10)
管理部副部長兼経理課長	関野英一(H11)
主任	江田和美(H10)
主任	腰塚雄二(H11)
主任	福田昭美
主任	菊池　久
庶務課長	金子　隆
主査	田中裕二
主任	長滝美智子
主任	腰塚雄二(H10)
主任	江田和美(H11)

調査部

調査部長	谷井　彪(H10)
	増田逸朗(H11)
調査部副部長	水村孝行
調査第三課長	杉崎茂樹(H10)
専門調査員兼調査第1担当	鈴木敏昭(H11)
統括調査員	栗島義明(H10)
統括調査員	若松良一(H11)
主任調査員	渡辺清志

(2)　**整理事業**（平成11年度）

理事長	荒井　桂
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	広木　卓

管理部

管理部副部長兼経理課長	関野英一
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
主任	菊池　久
庶務課長	金子　隆
主査	田中裕二
主任	江田和美
主任	長滝美智子

資料部

資料部長	高橋一夫
専門調査員兼資料部副部長	石岡憲雄
主任調査員	渡辺清志

Ⅱ　遺跡の立地と環境

地形環境

大滝村は埼玉県最西部に位置している。総面積は約330㎢で、これは県土全体の1割に近い。

地形区分上は奥秩父山地に属しており、村域の7割が標高1000m以上の高地である。

この山地を、荒川源流部と、その支流である中津川が東西に貫いており、随所に急峻なV字谷を形成している。両河川に挟まれた白泰尾根は周囲に比べ標高も低く、起伏に乏しい特異な地形を示している。

村境の北縁は両神村、東縁は荒川村に接している。また、西縁から南縁は群馬・長野・山梨・東京の各都県境に接しており、県内最高峰の三宝山（2483m）をはじめとする2000m級の山々が立ち並んでいる。

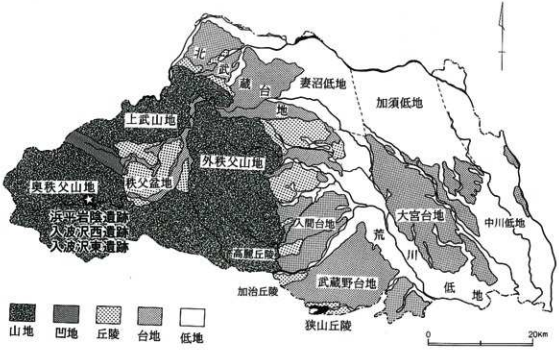
交易のムラ

川沿いの道路は、山村の人々の生活資材を搬入し、またその生産物たる林・鉱業産品や獵・漁産品を平地へと送り出す動脈として機能してきた。

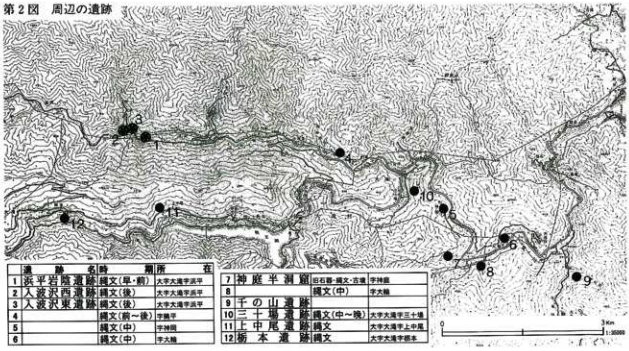
また、荒川沿いの道をさかのぼると雁坂峠を経て甲府盆地に至り（現・国道407号線）、一方で中津川沿いの道は三国峠を越えて、佐久方面に至る（現・中津川林道）。これら荒川源流の道は、中部高地と関東とを結ぶ交通路のひとつでもあったのである。新編武蔵風土記稿の記事によれば、近代の車道整備以前、旧「中津川村」の住人は炭・油・酒等の物資の補給を、秩父盆地よりむしろ信州側との交易に頼っていたようだ。

遺跡の所在する元の浜平集落は、西に接する塩沢集落とともに、近世における「新大滝村」の西界をなしていた。ここから上流の「中津川村」に至る道筋が、永く牛馬すら乗り入れることの不可能な隘路であったことを考えるならば、それが数千年あまりの時間を隔てた縄文時代のことであれ、この場所に数時期にまたがる拠点的な集落が営まれたことは必然であったとも

第1図　埼玉県の地形図



第２図　周辺の遺跡



	遺跡名	時期	所在
1	浜平岩陰遺跡	縄文(早・前)	大字大滝字浜平
2	入波沢西遺跡	縄文(後)	大字大滝字浜平
3	入波沢東遺跡	縄文(後)	大字大滝字浜平
4		縄文(前～後)	字鶴平
5		縄文(中)	字神岡
6		縄文(中)	字大輪
7	神庭半洞窟	旧石器・縄文・古墳	字神庭
8		縄文(中)	字大輪
9	千の山遺跡		
10	三十場遺跡	縄文(中～後)	大字大滝字三十場
11	上中尾遺跡	縄文	大字大滝字上中尾
12	栃本遺跡	縄文	大字大滝字栃本

思える。

すなわち入波沢西・東の縄文集落は、自己完結した集落という以上に、交易の拠点、情報と物資の集積場としての意味合いを強く有していたと考えざるを得ないのである。

「信州ルート」である中津川と、雁坂峠を介して甲府盆地に続く「甲州ルート」である荒川最上流部との合流点には、縄文時代中期から晩期に至る集落の存在が予想される三十場遺跡が存在する。

さらに、この合流点から中津川を１キロあまり遡った地点には、縄文時代前期～後期の遺物が採集された鶉平散布地が位置している。

こうした河川と遺跡立地との関係のありようからは、狩猟採集民＋交易民としての縄文人の姿がいやがうえにも浮かび上がってくる。

周辺の遺跡

大滝村周辺の遺跡については、調査事例の乏しさから不明な点が多い。

神庭半洞窟（第２図７）は昭和33年、直良信夫の調査で、旧石器時代の尖頭器と縄文土器・土師器・須恵器が出土した。その後、平成４年、埼玉県立博物館の調査では、草創期～中期の遺物が出土している。

三十場遺跡（第２図10）は昭和37年、村教委および群馬大学の発掘調査で、勝坂・阿玉台式土器と、これに伴う竪穴住居跡１軒が発見されている。

大輪遺物散布地（第２図６）は、大洞変電所関連施設の建設の際に縄文時代中期の遺物が出土しているが、個人蔵であり、今回実見することはできなかった。

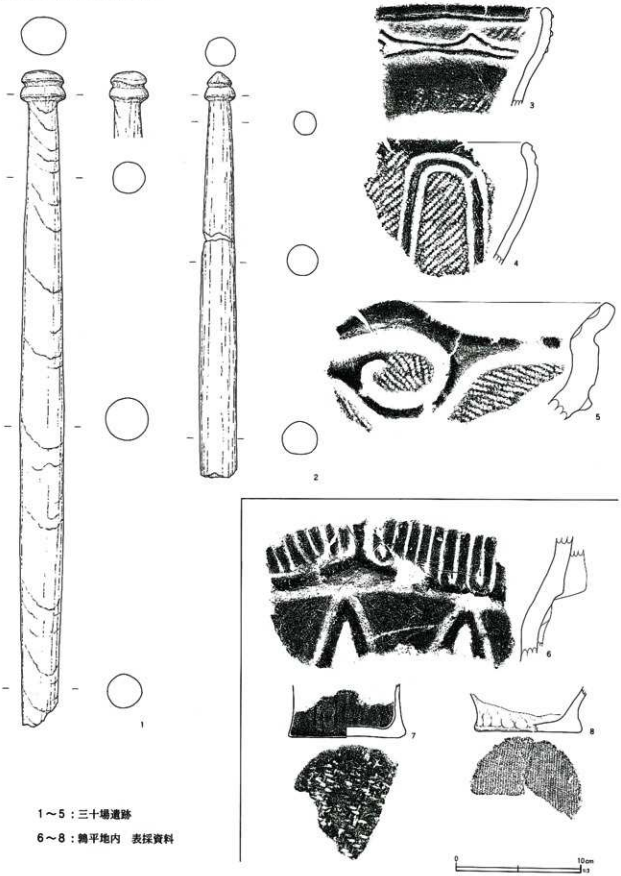
近隣市町村では、同一水系の荒川村で中期後半～後期前半の集落跡が発見された姥原遺跡、前期諸磯式の大畑遺跡他が報告されている。

なお、本書の編集に際し、大滝中学校より、同校所蔵の村内出土遺物の資料提供を受けた。遺物は標本ケース５箱に収められていた（第３図）。

三十場遺跡は、昭和37年の発掘調査時には縄文時代中期中葉の住居跡が検出されたとのことであるが、今回実見した資料中には３～５のような、縄文時代中期末葉の土器片が多数含まれている。また、１・２の有頭石棒は後期ないし晩期のものである。

字鶉平遺物散布地の表採資料は、６が中期後半の加曽利ＥⅡ式、７・８が後期の堀之内式と思われる底部である。他に多量の剥片類が存在した。

第３図　大滝中学校保管資料



１～５：三十場遺跡

６～８：鵜平地内　表採資料

Ⅲ　浜平岩陰遺跡

1　遺跡の概要

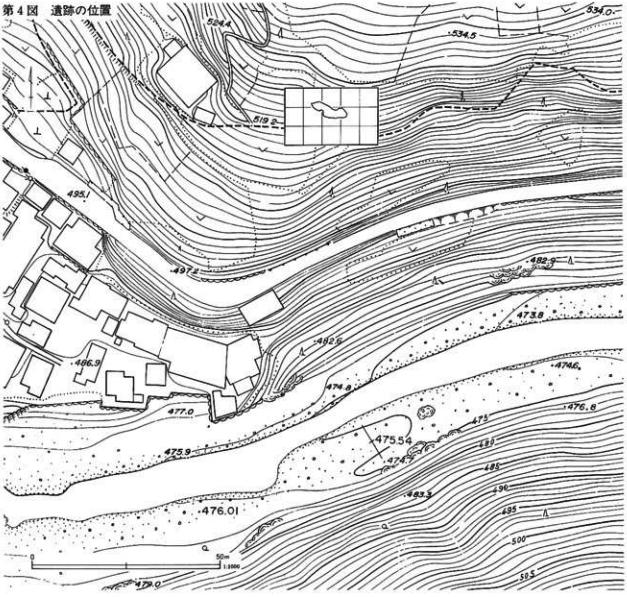
字名浜平から荒川との合流点までの中津川はほぼ東西にひらけ、急峻なV字谷地形をなしている。ダム建設計画以前にはこの渓谷の左岸側を中心として、大小の集落が点在していた。

渓谷南斜面の中腹に位置する滝の沢集落と、河岸段丘上に位置する浜平集落を上下に結んでいた旧道の半ばほどには、小さな尾根が中津川に向かって張り出している。激しく蛇行して流れ下った中津川は、この尾根を境に急激に川幅を増して、ほぼ真東に流れ下っている。このため尾根の上からは下流の渓谷全体を一望することができる。

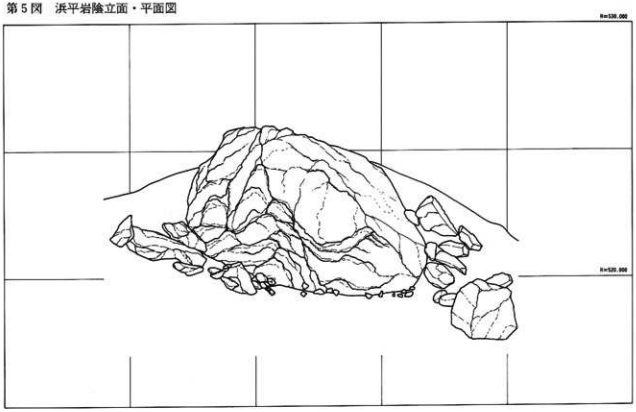
この尾根の先端部に、巨大な一枚岩が露出している。尾根はこの岩盤の直下から、急角度で中津川河床へと落ち込んでいる。その比高差は約38mである。

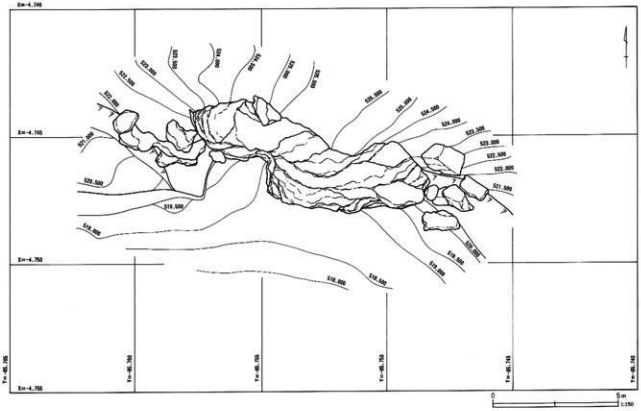
岩盤の下はオーバーハングしており、風雨を避けるには格好の環境となっている。この岩陰はキャンプサイトとして利用されたのではないかと考えられ、縄文時代草創期～早期の遺物包含層の存在が予想された。

第４図　遺跡の位置



第５図　浜平岩陰立面・平面図





2　発見された遺構と遺物

(1)　岩陰（第６図～第８図）

浜平岩陰遺跡を形成している岩盤は、青灰色のチャートの巨大な一枚岩である。差し渡し9.6m、高さ6.7m、長軸方向はN－72°－W。現状で40度あまり南に傾斜している。

岩庇（いわびさし）は平均２～３ｍ張り出して風雨をさえぎり、下面にダム計画以前は共同墓地として利用された、わずかな平場が形成されていた。

平場の面積は約30㎡であった。北を岩盤に接し、東は岩盤の背後から流れ出すガレ場、西は尾根続きの急斜面、南縁は中津川に面した崖である。

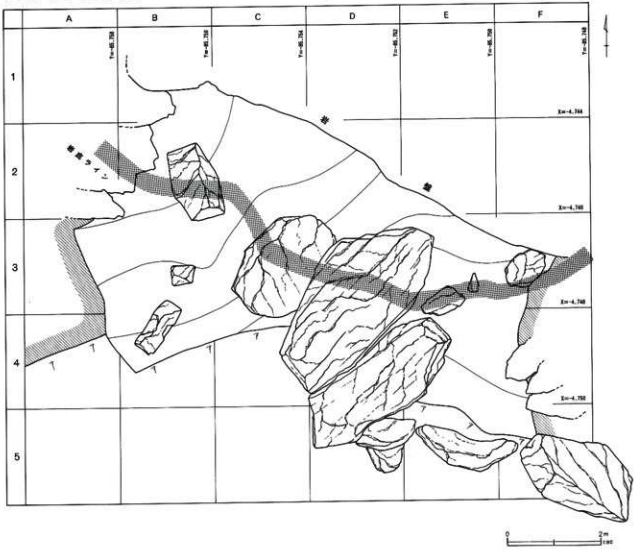
重機による表土除去の直後から、畳１畳～２畳大の岩塊が行く手を阻み、発掘調査はこれらの岩石撤去に大幅に時間と手間を取られることとなった。

岩陰の堆積物は、こうした落石に由来する大小の岩石が主体をなし、腐食の発達は概して低調、ほとんど礫石のみにより構成される層も観察された。往時の落盤のすさまじさを物語るものであろう。

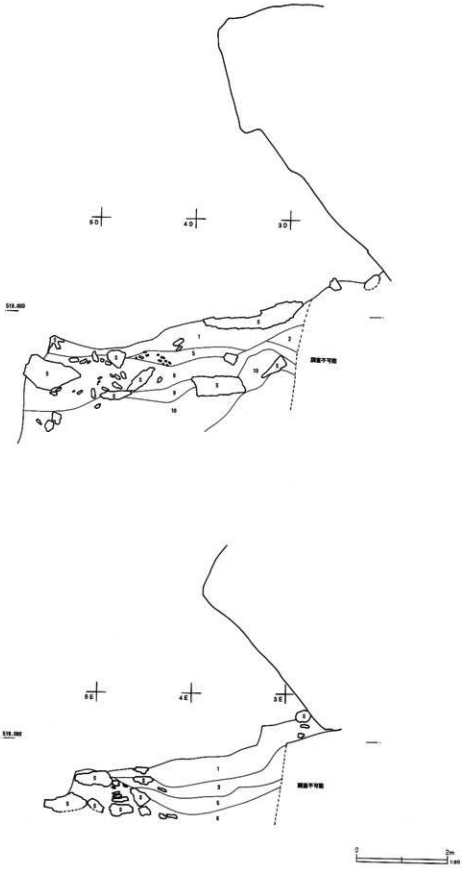
現表土から1.2mあまり掘り下げたところで、遺物が出土し始めた。

遺物包含層は上下２層からなり、第５層と命名した

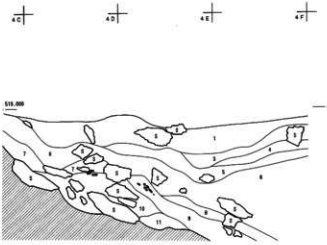
第６図　グリッド配置図



第７図　土層断面図(1)



第８図　土層断面図(2)



黒褐色混礫土層からは羽状縄文の施文される縄文時代前期初頭～前葉の土器が、第６・７層と呼んだ暗黄褐色の混礫土層からは表裏に条痕文が施文される早期末葉の土器片が、それぞれごく少量出土した。

遺物包含層中には炭化物の混入がみられたが、灰層や焼土層の形成は不全で、遺構らしきものも確認されなかった。

７層を過ぎると遺物の出土は止まり、さらに50～80cm掘り下げたところで地山と思われる火山灰質の暗黄褐色混礫土層が露出した。現地表からの深度はすでに３ｍを超過していた。

７層以下で遺物の出土がみられなかったことと、安全上の配慮から、それ以上の掘削は断念し、発掘調査を終了した。

(2)　出土遺物（第９図）

１は早期末葉とみられる条痕文系の土器である。表面のみ縦位の条痕文が施文される。胎土に多量の繊維が混入される。器面に補修孔がみられる。

２は痕擦の土器で、やはり早期末葉と考えられる。

３以下は前期羽状縄文系の土器で、胎土に多量の繊維を混入する。

３は口縁部である。口縁は内屈し、口端は内削ぎ状を呈する。施文原体はＲＬ・ＬＲの、いずれも単節縄文である。４は胴部破片で、ＲＬ単節の縄文が施文される。やや微細な縄文と暗褐色の器壁が、３に類似する。

５以下は単節の縄文が施文される小破片である。赤褐色の脆弱な器壁で、器面の風化が甚だしい。

第９図　グリッド出土遺物

Ⅳ　入波沢西遺跡

1　遺跡の概要

中津川に合流する入波沢の河口両岸には、この地域としては緩やかな斜面地形が発達し、各々縄文時代後期に属する集落遺跡が立地している。二つの集落遺跡はそれぞれ入波沢西・入波沢東と命名された。

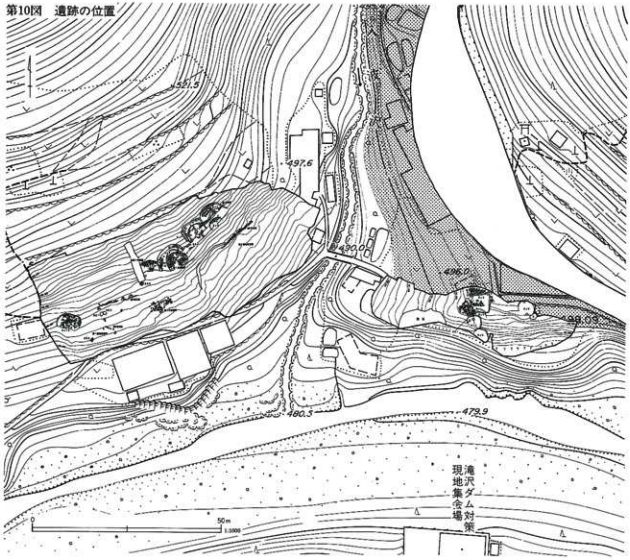
入波沢西遺跡は上流側の斜面に所在する。現河床面からの比高差は15～40mで、周辺の傾斜は最大30度を超える。冬場は寒冷な土地ながら、山並みが南東方向にひらけているため日照に恵まれており、遺構群はこの斜面地のほぼ全面にわたって存在していた。

遺跡の立地する斜面は、渓谷には稀な上下二面の段丘地形を構成するものとみられた。竪穴住居跡は、主として上位段丘面縁辺に占地している。

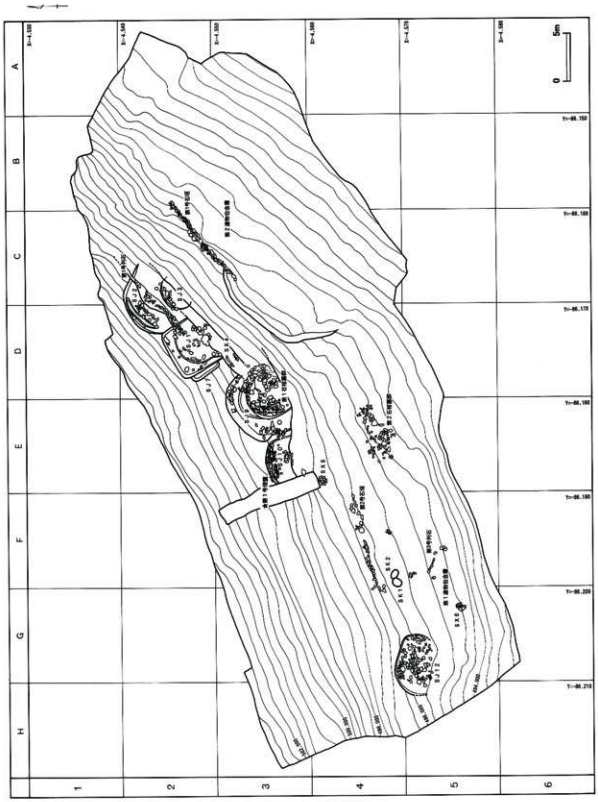
地山の状況は火山灰質の黄褐色砂質シルトを主体とするが、崩落と再堆積を繰り返し、大半の地点で黒色土との互層を形成している。このため、特定の時代の生活面を特定することは極めて困難であった。

発見された遺構はほとんどが縄文時代のものである。内訳は住居跡7軒、石棺墓6基、配石遺構3基、列石遺構3条、埋設土器1基で、これ以外に土器捨て場とみられる遺物包含層が発見された。

第10図　遺跡の位置



第11図　調査区全体図



2　発見された遺構と遺物

1．縄文時代

(1)　住居跡

第１号住居跡（第12図～第14図）

Ｄ－３・４グリッドに所在する。第２・３・７号住居跡を切っている。第１号列石遺構に切られているようだが、東壁際では列石の連続が明瞭に確認できるものの、中央部から西では礫の分布が疎らになっている。

斜面下側が崩落によって失われている。主軸方向に対してやや横に長い隅丸長方形を呈し、長径5.7m、短径4.2mを測る。主軸方向はＮ－40°－Ｗを指し、出入り口部が斜面の下側を向いている。

先述のとおり、入り口部の大半が崩落によって失われており、壁の立ち上がりは残っていない。一方、奥壁は残存状態が良好で、壁高は1.44mを測る。

内部空間は長方形の外陣と、円形ないし半円形の内陣から構成されている。柱穴は内陣外陣それぞれの壁に沿って配置されている。柱穴の規模・深さは表のとおりである。なお、外陣奥壁よりの主軸線上で検出したＰ３は覆土中から焼土が検出されており、何らかの特殊な機能が想定される。

炉跡は長方形の石囲いが炉である。焼土の堆積はそれほど顕著ではなかったが、炉石の内側が被熱の痕跡を示していた。

先述のとおり、出入り口の施設は斜面の崩落によって失われているが、ハの字状に開く柱穴列だけが検出された。

内陣に沿って若干の礫が巡っているが、床面からは若干浮き上がっており、居住の時点でこれらの礫が存在していたかは不明である。外陣の北コーナー部分に大型の平石がみられるが、これは地山中の転石が顔をのぞかせたものである。

覆土中からは多量の土器片・石器類・礫が検出された。土器は大半が縄文時代後期中葉の加曽利Ｂ１式である。

出土遺物（第15図～第18図）

１は床面直上から出土したもので、円筒形の小型深鉢土器である。胴部中段から口縁の突起までが残存する。全体の器形はやや内湾しつつ立ち上がるもので、口端は内屈する。口縁はほぼ水平である。

口縁上に三単位の円盤状突起が配されるが、それらは１条の沈線によって互いに連繋されている。突起部には「の」の字状の沈線文が描かれる。

胴上半部には５条の平行沈線が巡る。沈線間はノの字状の端沈線によって連結される。また、この沈線間には、ＬＲ単節の縄文が横位回転で施文される。

器面は灰黄褐色～淡紅色でやや風化がみられる。シルト質の軽挑な胎土である。

口径推定16.2cm、最大径17.4cm、現存高11.5cmを測る。

２は注口土器の胴上半部である。ソロバン玉形の体部からほぼ垂直に立ち上がる部分で、口縁は内屈し、ここに刻みを伴う隆帯を巡らせて器面を上下に区画する。

口縁部には沈線による横楕円形のモチーフが描かれる。モチーフの接点には、縦一対の豆粒状の貼付文が付される。この貼付文の下部には「の」の字状の沈線文が描かれる。器面は黒色で、研磨が徹底され、光沢を生じている。

第２表　第１号住居跡柱穴一覧表

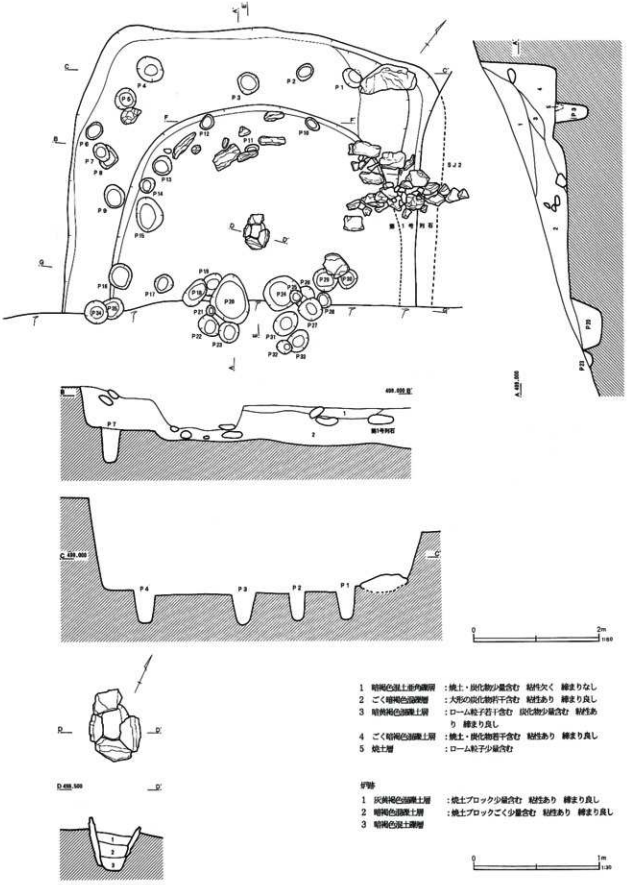
柱穴番号	P１	P２	P３	P４	P５	P６	P７	P８	P９	P10
口径(cm)	30	28	34	42	32	28	28	30	36	24
深さ(cm)	41.7	43.2	50.6	57.9	59.2	26.5	48.5	16.8	58	14.9

柱穴番号	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20
口径(cm)	16	24	34	24	54	42	30	45	38	80
深さ(cm)	22.8	16	47.9	70.9	32.6	63.7	46.3	33.6	37.7	45.7

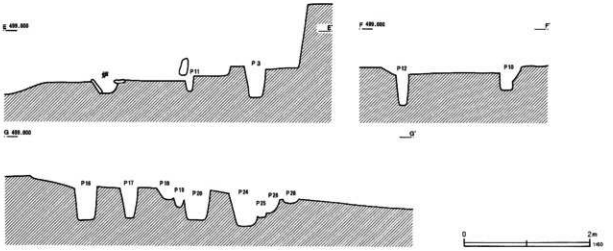
柱穴番号	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30
口径(cm)	34	34	32	60	30	28	36	24	38	30
深さ(cm)	25	17.9	13.9	49.4	34.7	26.1	28.8	14.2	23.5	11.1

柱穴番号	P31	P32	P33	P34	P35
口径(cm)	40	24	34	40	37
深さ(cm)	38.2	26.7	31.2	35.7	17.4

第12図　第1号住居跡(1)



第13図　第Ⅰ号住居跡(2)



口径推定6.8cm、最大径8.4cm、現存高4.9cmを測る。

3・4は無文の胴下半部である。4は網代圧痕のある上げ底状の底部まで残存するが、3は接合面から下が欠落している。いずれも胴部中段にかけて直線的に開くバケツ形の器形である。

3は最大径11.2cm、現存高9.7cmを測る。4は最大径16cm、現存高8.4cm、底径10cmを測る。

5は紐線文が施文される口縁部である。胴部には横位の平行沈線が巡り、ＬＲ単節横位回転の縄文が施文される。6も紐線文の口縁だが、口縁下の無文帯の幅が広く、また、胴部の平行沈線帯が2段構成となっており、上下の文様帯の間に対弧状の沈線が挿入されている。

7～9は口縁下に無文帯を持つ口縁である。

7は平行沈線帯が3段構成となり、間隙にひし形のモチーフが挿入される。8は浅鉢で、平行沈線帯は2段構成、間隙に対弧状のモチーフが挿入される。

9は1段構成の文様帯で、平行沈線の末端が屈曲して上下の沈線を連結する。

10・11は無文土器の口縁である。口唇内面に1条の沈線が巡る。

12～14は紐線文の口縁である。12・13は口唇内面に1条の沈線が巡る。胴部には平行沈線文が描かれる。

16～29は平行沈線文の土器である。

16は口縁下に1条の沈線が巡り、内文を有する。17は上下になぞりを加えた隆帯が巡らされ、隆帯上にも縄文が施文される。

20・27・28は沈線間がノの字状の沈線で連結される。22・25等は沈線の末端が屈曲して、上下の沈線が連結される。

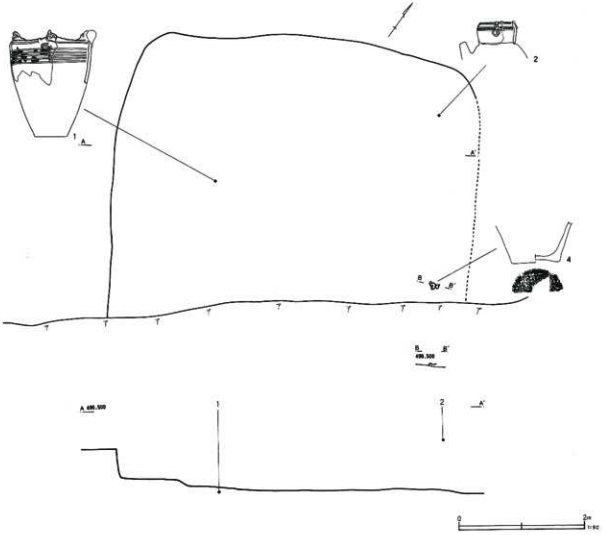
27は沈線間に対弧状のモチーフが描かれる。25・26・28は平行沈線帯の間隙にひし形のモチーフが挿入される。

31・32は波状口縁で、口縁下に斜めの刻みを伴う隆帯が巡る。胴部には平行沈線による同心円状のモチーフがみられる。33・34は器面や沈線のタッチから、このタイプの土器の同部破片とみられるもので、平行沈線による曲線的なモチーフが描かれる。

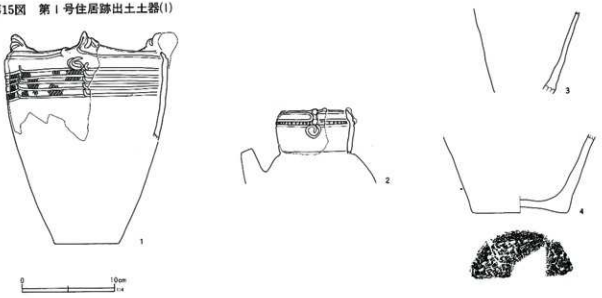
36は胴部に格子目文が描かれる。文様帯の上端は横位の沈線で区画される。地文はＬ無節の縄文で、口縁直下にまで乱雑に施文される。

41・42は注口土器である。

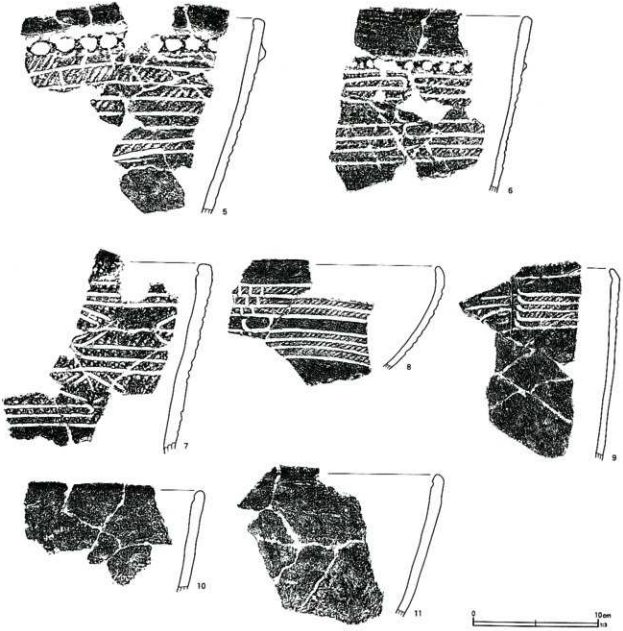
第14図　第Ⅰ号住居跡遺物分布図



第15図　第Ⅰ号住居跡出土土器(1)



第16図　第１号住居跡出土土器(2)



41は球状に張り出す胴部で、たすき状に走る平行沈線の接点に、「の」の字状の沈線文が描かれる。

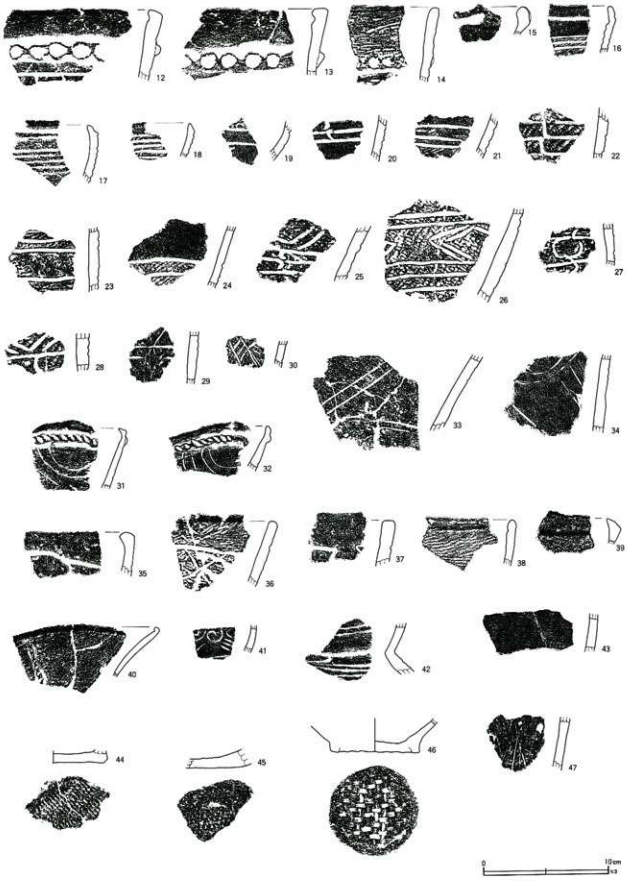
42は胴部とドーム状に立ち上がる頸部との境界部分であろう。頸部・胴部ともに平行沈線文が描かれる。

44～46は網代圧痕のある底部である。37は称名寺式、15・35・39は堀之内１式の口縁部であろう。

40は堀之内２式で、信州系の鉢形土器の口縁部であろう。

水平口縁で、口端は肥厚して、内面に１条の沈線が巡る。頸部は無文地に刻みを伴う隆帯が垂下する。朝顔状の口縁～頸部に、貧弱な体部が付属するもので、類例は第９号住居跡他に見ることができる。

第17図　第Ⅰ号住居跡出土土器(3)



第3表　第1号住居跡石器一覧表

石鏃

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石材	形態	(長さ/幅)比	残存度
1	№11	(2.0)	(1.4.5)	4.7	0.94	黒曜石	E		②+③
2	4区	23.0	14.5	3.3	0.56	チャート	A-1		②

スクレイパー

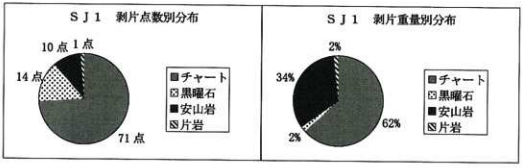
番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石材	形態Ⅰ	形態Ⅱ	残存度
1	№98	51.5	68.0	14.1	51.68	安山岩	A-2	b-1	①
2	№110	35.0	52.0	8.2	14.71	チャート	A-2	b-1	①

磨石

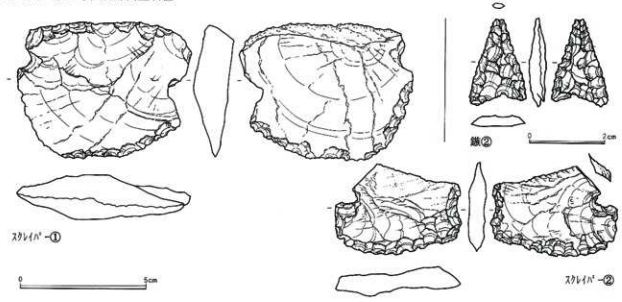
番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石材	形態	残存度
1	№45	75.5	71.0	31.5	265.55	花崗岩	A-1	①
2	№53	104.5	71.0	32.5	312.24	安山岩	B-2	①
3	№61	121.0	73.5	53.0	577.81	安山岩	B-1	①
4	№62	135.5	87.0	54.0	807.74	安山岩	B-2	①
5	№65	105.0	93.5	67.5	935.96	砂岩	A-1	①
6	№73	121.5	89.5	31.0	552.44	花崗岩	B-2	①
7	№74	65.0	56.5	33.0	158.57	花崗岩	A-3	①
8	№100	(61.0)	(76.5)	(26.5)	87.30	砂岩		②
9	№137	(80.0)	(55.0)	69.5	368.40	花崗岩	A-2	②
10	№166	56.3	44.5	35.0	109.13	花崗岩	A-1	①
11	1区	55.5	40.0	23.0	74.99	砂岩	B-1	①
12	2区	108.0	76.5	55.5	639.72	花崗岩	B-2	①
13	4区	74.0	50.0	39.0	221.23	砂岩	B-1	①

凹石

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石材	形態Ⅰ	形態Ⅱ	残存度	転用元
1	№36	(158.5)	(115.0)	55.0	1631.09	花崗岩	B-2	a	②	磨石
2	№121	112.5	103.0	70.5	1156.35	花崗岩	A-1	a	①	磨石
3	3区	125.0	101.0	46.5	850.01	花崗岩	B-1	a	①	−



第18図　第1号住居跡出土石器



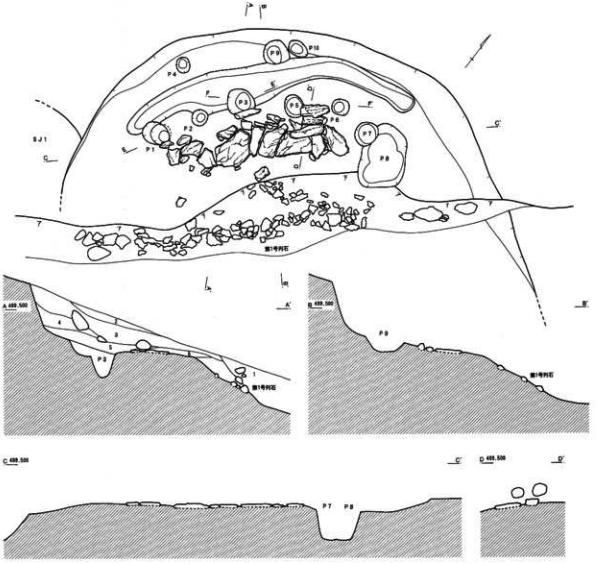
第２号住居跡（第19図・第20図）

Ｃ－２・Ｄ－２グリッドに所在する。第１・３号住居跡、第１号列石遺構に切られる。プランの大半を切りあいによって失っており、円形の主体部の奥壁部分だけが残存している状態である。本来は柄鏡形の住居跡であったものだろう。主軸はＮ－45°－Ｗを指していたものとみられ、残存部分の最大径は6.62ｍを測り、比較的大型の敷石住居跡であったものとみられる。

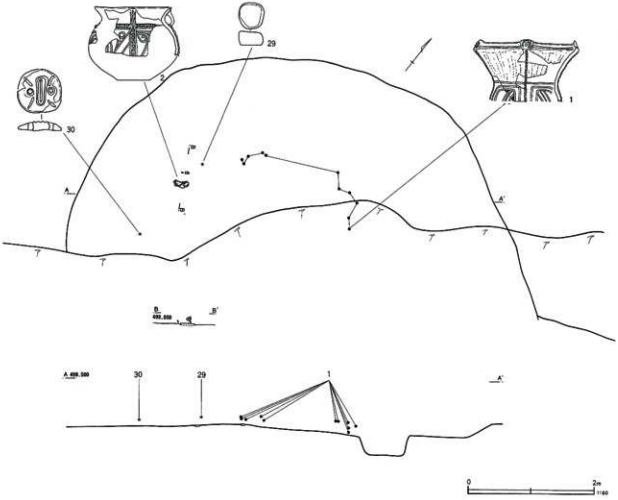
第４表　第２号住居跡柱穴一覧表

柱穴番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P10
口径(cm)	46	25	46	24	38	36	40	98	40	32
深さ(cm)	54.6	50.2	60.9	33	50	47	43	35	13	13

第19図　第２号住居跡



第20図　第２号住居跡遺物分布図



奥壁部分の壁高は0.7mを測る。

床面には敷石が施されている。主として結晶片岩系の板石が用いられ、円形ないし隅丸方形に配置されていたものとみられる。敷石縁辺に縁石風の造りは見られない。床面中央には炉跡が存在したものとみられるが、第１号列石との切りあいによって失われており、若干の焼土の散布が確認されるにとどまった。

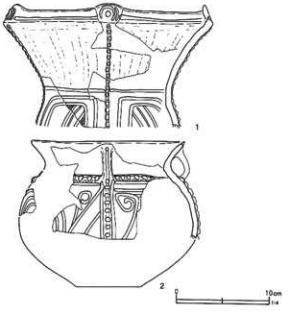
壁と敷石との間から、柱穴が検出された。壁柱穴の構成をとるものと見られる。柱穴の規模・深さは表のとおりである。

出土遺物は縄文時代後期前葉を中心とする土器・石器・土製品で、大半が縄文時代後期前葉堀之内１式期のものである。

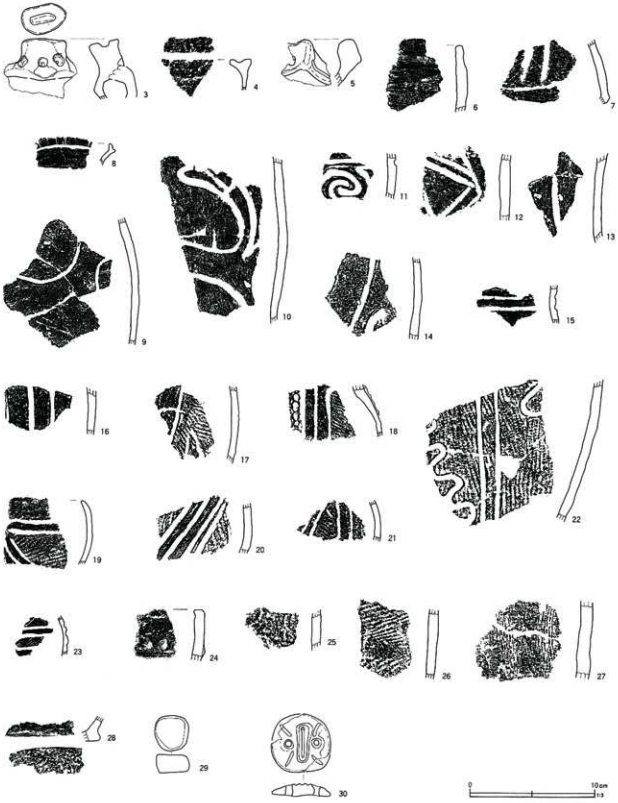
出土遺物（第21図～第23図）

１は深鉢で、４単位の小波状口縁をなす。波頂部に

第21図　第２号住居跡出土土器(1)



第22図　第２号住居跡出土土器(2)



第５表　第２号住居跡石器一覧表

石 鏃

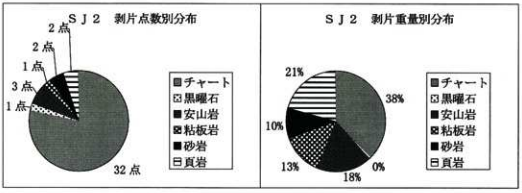
番号	出土状況	長 さ	幅	厚 さ	重 量	石 材	形 態	(長さ/幅)比	残存度
1	№39	17.0	12.0	4.4	0.63	黒 曜 石	A-1	1.4	⑧

石 錐

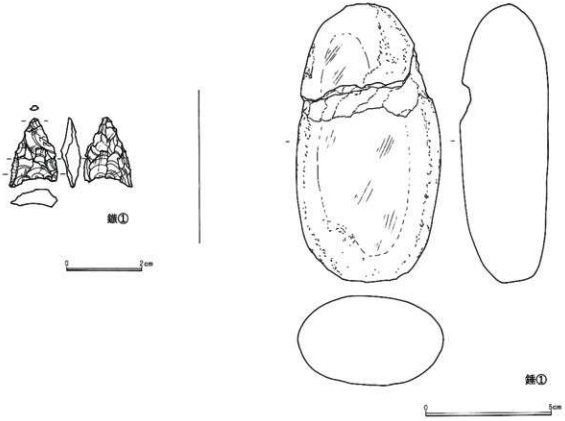
番号	出土状況	長 さ	幅	厚 さ	重 量	石 材	形態Ⅰ	形態Ⅱ	残存度
1	№33	112.5	57.5	39.0	337.51	凝 灰 岩		b	①

磨 石

番号	出土状況	長 さ	幅	厚 さ	重 量	石 材	形 態	残存度
1	№4	(130.5)	68.0	39.5	542.29	砂 岩	C	③
2	№5	63.0	48.5	24.0	107.74	安 山 岩	B-2	①



第23図　第２号住居跡出土石器



は短沈線による同心円状のモチーフが描かれ、左右に1条の沈線で連繋される。また、波頂部から胴部にかけて連鎖状浮線文が垂下する。頸部は無文である。

胴部には平行沈線で逆U字状の区画が描かれる。内部にはLR単節の縄文が施文され、たすき状の磨り消しモチーフが描かれる。

口径推定22.2cm、現存高13cmを測る。

2は橋梁把手を持つ壺形土器で、胴下半部を欠失する。器高に対し口径および胴部最大径が卓越する、非常にずんぐりした器形である。

頸部と胴部の間に刻みを伴う隆帯が巡る。胴部文様帯は、把手を基点とした縦位の隆帯によってパネル状に分割され、内部には渦巻き文が描かれる。

口径推定16.4cm、最大径19cm、現存高10.2cmを測る。器面は黒褐色で光沢を有する。

第3号住居跡（第24図・第25図）

C－2・D－2グリッドに所在する。第2号住居跡を切っており、第1号列石遺構に切られるものとみられる。円形の主体部に出入り口の張り出しを持った柄鏡形の住居跡であったものとみられる。

斜面の崩落によって奥壁部分を除くプランの大半を失っており、第1号列石遺構との切り合いの結果、壁の立ち上がりすら失っている。

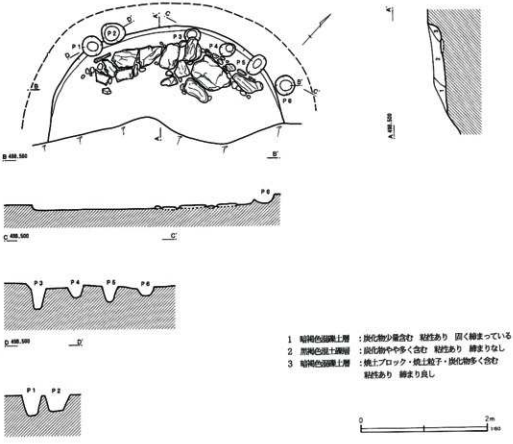
今回検出されたのは円形の敷石のうち、奥壁寄りのごく一部分だけである。主軸方向は不明、敷石部分の差し渡しは最大で約4.6mを測る。

敷石の周囲に、最大10cm程度のごく浅い立ち上がりを検出したが、これは住居跡床面のうち内陣部分を示すものであり、本来の壁はさらに外側に存在したものと考えられる。

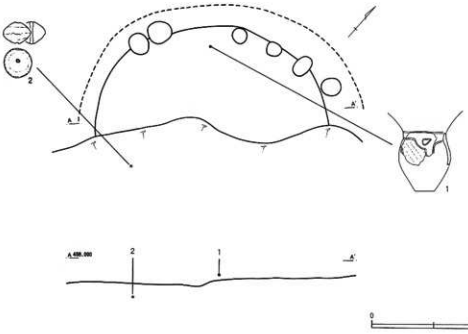
第6表　第3号住居跡柱穴一覧表

柱穴番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6
口径(cm)	35	38	24	25	34	34
深さ(cm)	36.9	27.3	33.3	19.7	24	13.9

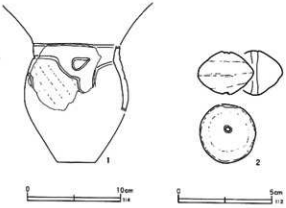
第24図　第3号住居跡



第25図　第３号住居跡遺物分布図



第26図　第３号住居跡出土土器(1)



内陣の立ち上がりを切って、６本のピットを検出した。壁柱穴の構成をとるものとみられる。

敷石は大半が凝片岩の自然石で、若干の打割整形がなされているかもしれない。平坦面を上向きに、ほぼ水平に揃えている。

遺物はごく少量で、縄文時代後期前葉を中心とした土器・石器・土製品が出土した。

出土遺物（第26図・第27図）

１は小型深鉢の胴部破片である。頸部との境が１条の沈線によって区画され、胴部に平行沈線による曲線モチーフが描かれる。

黒褐色の堅緻な器体で、へら状工具による研磨が施される。

最大径11cm、現存高6.4cmを測る。

２は有孔の土製品で、垂飾と考えられる。段丘崖のやや下方で出土しており、本住居跡への帰属はやや疑わしく、古墳時代の土玉の可能性もある。

胴部中段に稜を持つ、やや腰高のソロバン玉形で、上下方向に貫通孔が穿たれている。手づくねによる成形であり、部分的に指頭の痕跡が残る。全面に軽いなで調整が施される。

胎土は峡雑物の少ない粘土で、灰橙色を呈し、黒斑がみられる。

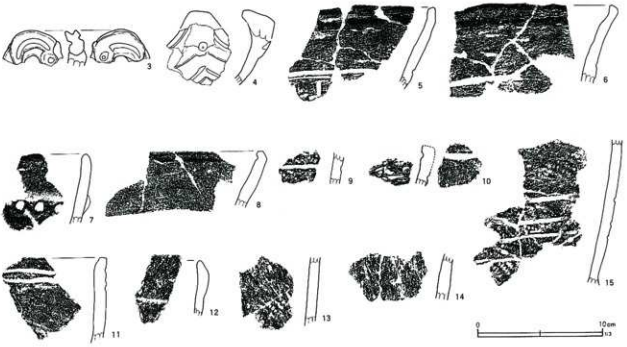
直径３cm、厚さ2.3cmを測る。

３は口縁に付される円盤状の突起である。中央に貫通孔を有し、周囲を短沈線と盲孔で縁取る。

４は波状口縁の波頂部である。二重口縁をなし、外面に段を形成する。口縁下には平行沈線の波状文が描かれる。

５は水平口縁で、口縁下に幅広の無文帯を持つ。胴部との境は１条の沈線で区画され、縦位の沈線が垂下する。口端は軽微に内屈する。６もこれに類似するが、

第27図　第３号住居跡出土土器(2)



口端の造りが異なっている。

７は刻みを有する隆帯が巡る口縁である。口唇断面丸棒頭状で、口端がわずかに内屈する。８・10は外面無文、内面に１条の沈線が巡る口縁である。

９は地文縄文で横位の平行沈線が描かれる。施文原体はＲＬ単節の縄文である。

11は口縁部で、口端直下に２条の平行沈線が巡る。口唇は上面平坦、内面内削ぎ状を呈する。

12の口縁は軽微に内湾し、外面肥厚する。胴部との境に１条の沈線が巡る。

15は横位の平行沈線が巡る胴部である。地文はＲＬ単節の縄文で、横位回転で施文される。

13はＲＬ単節の縄文だけが施文される胴部、14は無文の胴部である。

第７表　第３号住居跡石器一覧表

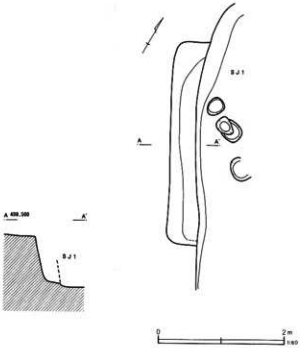
磨石

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石材	形態	残存度
1	№19	(92.5)	67.5	36.0	308.04	花崗岩	B-1	④

凹石

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石材	形態Ⅰ	形態Ⅱ	残存度	転用元
1	№21	93.5	71.5	54.5	511.35	砂岩	B-2	a	①	－

第28図　第７号住居跡



第７号住居跡（第28図）

Ｄ－２・３グリッドに所在する。第１号住居跡に切られており、西壁部分のみが残存する。平面隅丸長方形を呈する竪穴住居跡と考えられ、長径3.14ｍを測る。主軸方向は第１号住居跡とほぼ共通で、Ｎ－32°－Ｗを指す。壁高は斜面上の奥壁側が最大70cm、斜面下方ではほとんど残存していない。

遺物は土器の小破片が少量出土しているのみである。所属時期は不明だが、第１号住居跡との位置関係や平面形から、加曽利Ｂ１式期と考えられる。

第９号住居跡（第29図～第32図）

Ｄ－３・Ｅ－３グリッドに所在する。南壁部分は斜面の崩落によって失われている。覆土上層に第２号列石遺構が位置しており、また、床面直上に第１石棺墓群が構築されている。

住居プランは円形で配石を施される内陣と、隅丸方形ないし長方形で敷石を持たない外陣の二重構造をなしている。内陣部は直径5.7ｍ、外陣部は長径7.62ｍを測る。両者の間には12cmほどの段差が存在し、内陣のほうが若干低く掘りくぼめられている。

外陣部分の壁高は斜面上方では0.85ｍを測るが、斜面下方では失われている。

内陣部の配石は、外陣部との境に巡る縁石と、縁石内部を充塡する敷石から構成されている。

縁石は人頭大の川原石が小口立てにされている。第４号石棺墓の北側で石組みが複雑になっているのは、本住居跡が廃屋墓として転用される際の改造と見られ、この部分の石材を撤去したところ、本来の縁石と思われるものが検出された（第31図）。

敷石は凝片岩や粘板岩の板石を敷き詰めたものである。北西部では密だが、それ以外の部分では空白も目立ち、石棺墓の構築に当たって石材が転用されたことが考えられる。

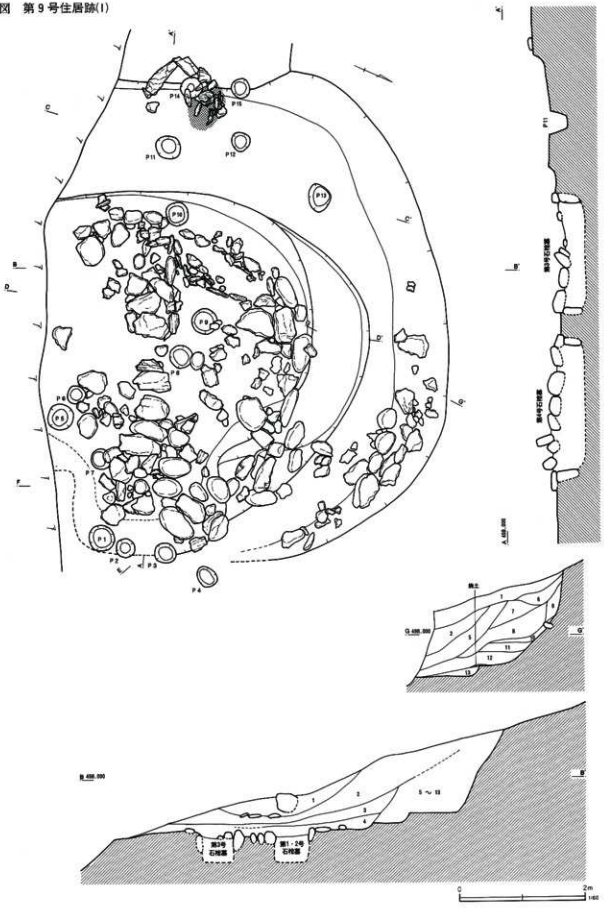
外陣部の北東隅で、壁に沿って積み上げられた全長3.5ｍほどの列石が存在する。入波沢東遺跡第５号住居跡でも、竪穴外部前面に竪穴を囲繞するように延びる列石が検出されており、両者は同性格のものと考えら

第８表　第９号住居跡柱穴一覧表

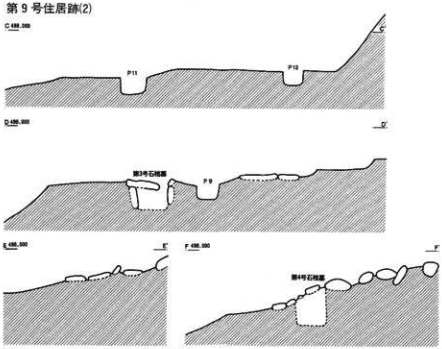
柱穴番号	P１	P２	P３	P４	P５	P６	P７	P８	P９	P10
口径(cm)	40	30	34	34	40	28	32	34	40	38
深さ(cm)	24.9	39.9	42.9	29.9	27.3	23	42.7	27.6	24.9	28.5

柱穴番号	P11	P12	P13	P14	P15
口径(cm)	40	30	40	36	31
深さ(cm)	25	25	21	28	25

第29図　第９号住居跡(1)



第30図　第９号住居跡(2)



1　暗灰黄褐色強粘土層　：炭化物若干含む　粘性あり　締まり良し
2　黒色混土層層　：炭化物若干含む　粘性あり　締まり欠く
3　黒色土層　：炭化物多く含む　焼土ブロック多く含む　粘性あり　締まりあり
4　黒色土層　：大量の炭化材を含む　焼土ブロック・炭化物若干含む　粘性あり　締まりあり
5　暗褐色強粘土層　：炭化物少量含む　粘性あり　締まり良し
6　黄褐色強砂シルト層　：ローム質の土層　粘性に富む　粘性あり　締まり良し
7　暗褐色強粘土層　：多量のローム粒子含む　焼土粒子・炭化物少量含む　粘性あり　締まり良し
8　茶褐色強粘土層　：ローム粒子微量含む　焼土粒子・炭化物多く含む　粘性あり　締まり良し
9　黄褐色強砂シルト層　：６層に似て、若干明色
10　暗黄褐色強粘土層　：黄褐色シルトと茶褐色土の混土　焼土粒子・炭化物少量含む　粘性あり　締まり良し
11　茶褐色強粘土層　：ローム粒子・焼土粒子・炭化物若干含む　粘性あり　締まり良し
12　暗褐色強粘土層　：ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物多く含む　粘性あり　締まり良し
13　茶褐色強粘土層　：ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物多く含む　粘性あり　締まり良し

0　2m
1:60

れる。ただし、本例では、列石は竪穴内部の外陣部分に配されている。

これは、第９号住居跡が傾斜地に設営されているために、平坦地に設営された入波沢東第５号住居跡では明確でなかった外陣空間が、竪穴の一部として顕在化した結果であろう。

列石は北東コーナー付近から始まって、出入り口部の配石と融合し、さらに第４号石棺墓の蓋石と連結している。この周辺の石組みは、本住居跡が廃屋墓となった後に手を加えられている可能性がある。

住居跡の東、主軸線に平行かつ若干北にずれた位置に、後述の道路状遺構が位置している。以上のように、本住居跡は廃絶後に集落内部の墓域として利用され、これに付随してかなり本格的な環境整備が施されたことがうかがわれる。

本住居跡の床面は混礫砂層に掘りこまれており、柱穴の検出は困難であった。精査を繰り返した結果、数本のピットを検出したものの、柱穴配置等は不明である。

本住居跡覆土中からは、多量の土器片・石器類が出土した。床面出土の土器は主として縄文時代後期前葉堀之内２式期のものである。したがって、住居としての利用はこの時期に属するものと思われるが、廃屋墓としての利用は若干時代が下る可能性もある。

出土遺物（第33図～第36図）

１は深鉢で、胴部中段から口縁にかけて残存する。胴部から口縁までほぼ直線的に開く朝顔形の深鉢で、口端内屈して稜を形成する。

口縁下に刻みを伴う１条の隆帯が巡り、８の字状の

貼付文が付される。

胴上半部に、平行沈線によって区画される文様帯を有する。区画内部は地文縄文上に多条沈線による大柄の菱形モチーフを描く。

地文はＬＲ単節の縄文で、横位回転でごく粗く施文される。

口径推定23.8cm、現存高14.1cmを測る。

２は紐線文の大型深鉢で、胴上半部から口縁にかけて残存する。

胴部中段に最大径を持つ樽形に近い器形で、口縁やや内湾する。口唇は軽微に肥厚し、口端上は平坦、内面に１条の沈線が巡る。

口縁下に無文帯を持ち、胴部との境に指頭圧痕を伴う隆帯が巡る。

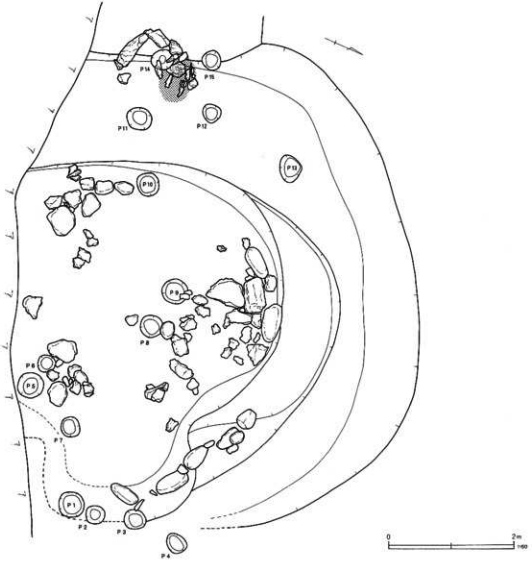
胴上半部に、上下を平行沈線により区画される文様帯を有する。内部には平行沈線によるたすき状のモチーフが描かれ、三角形の区画が描き出される。区画内部にはやはり平行沈線を用いた対弧状のモチーフが充填されるものとみられる。

地文はＬＲ単節の縄文で、横位回転でごく粗く施文される。

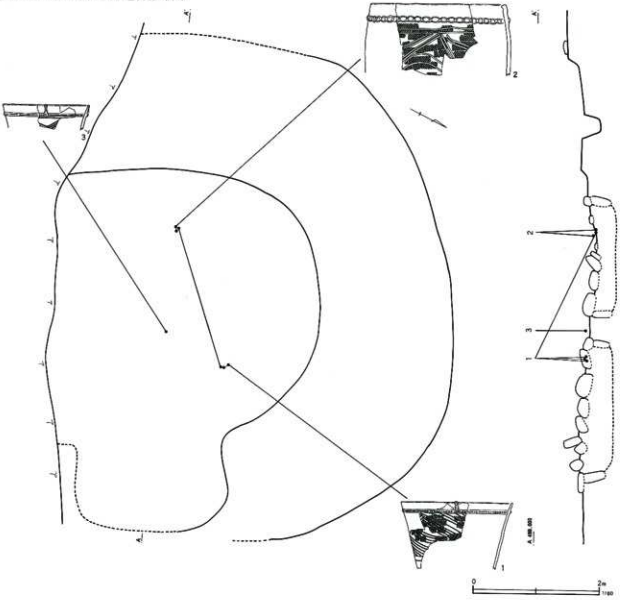
口径推定30.8cm、現存高15.6cmを測る。

３は朝顔形深鉢の口縁部である。胴部から口縁部にかけて直線的に開き、口端内屈して内面に稜を形成す

第31図　第９号住居跡(3)



第32図　第９号住居跡遺物分布図



る。口縁下に断面台形の隆帯が巡り、８の字状の貼付文が付される。

胴上半部に文様帯を有し、多条沈線により鋸歯状のモチーフが描かれ、三角形の区画を形成するものとみられる。

残存部分に関する限り、縄文は施文されない。口径推定18.8cm、現存高5.2cmを測る。

４は深鉢底部である。底部から胴部に向けてやや急な角度で広がっており、２のような樽形の器形か、南関東系の下北原式に伴うものである可能性がある。

へら状工具による幅広の研磨が縦位方向に施され、底部周辺では横位の削り調整の痕跡が観察される。

最大径17.7cm、現存高7.7cm、底径9.3cmを測る。

５は信州系の小型鉢で、胴部から頸部にかけて残存するが、本来浅いボウル状の体部と、長大な朝顔状の口縁と頸部からなる。頸部と胴部との境を、刻みを伴う１条の隆帯により区画し、８の字状の貼付文が付される。胴部には文様帯が展開し、上端は１条、下端は２条の平行沈線により区画する。

文様はすべて平行沈線により描かれ、紡錘文とたすき状の平行沈線の繰り返しによって入り組み状のモチーフを構成している。

地文はＬＲ単節の縄文で、充填手法でごく粗く施文される。

底部は欠失しているが、丸底に近い平底を呈するものであろう。

黄白色の堅緻な器体で焼成は良好。最大径18.8cm、現存高6.6cmを測る。

６は前期後葉の浮島・興津系の土器片で、覆土中への混入であろう。平行沈線間に貝殻腹縁圧痕文が施文される。７は中期の土器であろう。

８は称名寺式の口縁部、９は微隆起線文の胴部で、後期初頭における加曽利Ｅ系の土器であろう。

10は平行沈線間に列点文が充填される、いわゆる称名寺Ⅱ式である。11は称名寺式のスペード文の一部で、櫛歯状工具の条線文を地文とする。12はＶ字状のモチーフで、沈線間に円形の刺突文を充填する。

13～15は内屈する口縁で、口縁下に沈線区画を持ち、内部に刺突文が充填される。14は波状口縁で、波頂部に貫通孔を持つ。15も同一個体の可能性がある。

16は、頸部との境の屈曲部分に刻みを有する隆帯が巡る。17は波状口縁の波頂部にノの字状の短沈線文が描かれ、左右に１条の沈線が巡る。18は無文の口縁で、胴部にはＬＲ単節の縄文が施文される。

19～22は無文の頸部で、刻みを有する隆帯が垂下する。20は胴部との境を横位の隆帯で区画する。

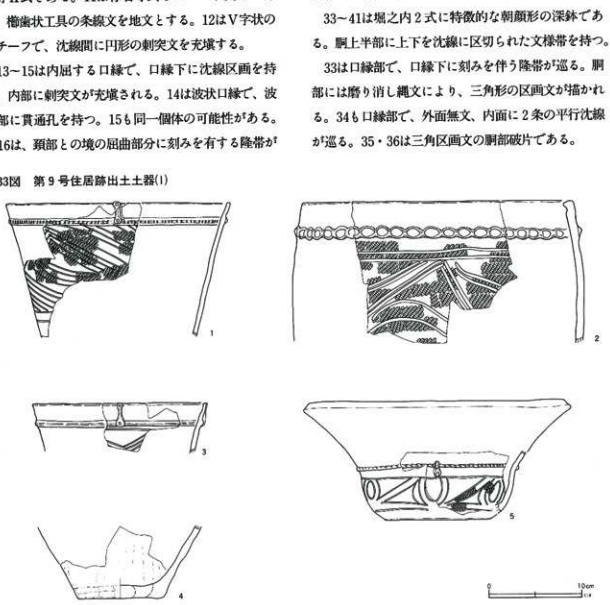
23～29は頸部無文の深鉢で、頸部と胴部の境界の区画帯である。横位の平行沈線間に列点を充填するもので、１段のものと２段のものが存在する。23・24は中段にボタン状の貼付文が付される。胴部には集合沈線が垂下する。23は弧状の集合沈線が、入り組み状の構成をなしている。32は同類の深鉢の胴部である。

30・31は浅鉢とみられ、頸部に扁平な隆帯が巡り、胴部には集合沈線文が描かれる。

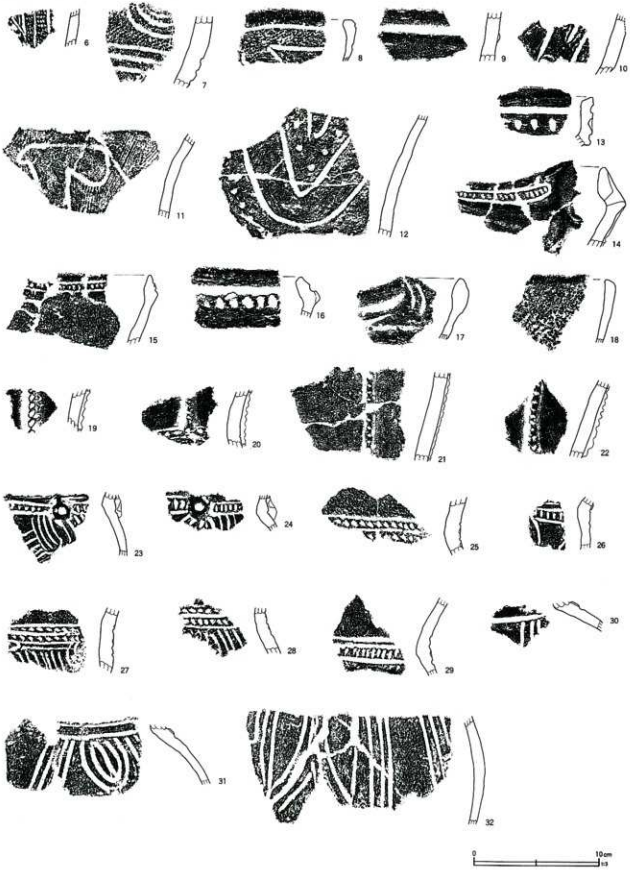
33～41は堀之内２式に特徴的な朝顔形の深鉢である。胴上半部に上下を沈線に区切られた文様帯を持つ。

33は口縁部で、口縁下に刻みを伴う隆帯が巡る。胴部には磨り消し縄文により、三角形の区画文が描かれる。34も口縁部で、外面無文、内面に２条の平行沈線が巡る。35・36は三角区画文の胴部破片である。

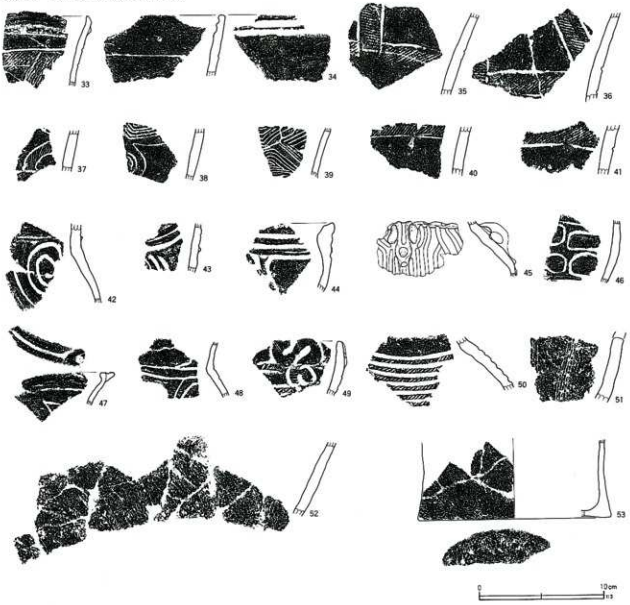
第33図　第９号住居跡出土土器(1)



第34図　第９号住居跡出土土器(2)



第35図　第９号住居跡出土土器(3)



37～39は曲線的なモチーフが描かれる北関東系の土器で、区画内に同心円状の集合沈線が充填される。

40・41は文様帯下端の区画部分である。

43はモチーフの余白部分に竹管状工具による円形刺突が充填される。注口土器の胴部であろうか。

45・46は壺形土器の胴部破片である。45は胴上半部である。頸部との境に刻みを伴う隆帯が巡る。肩部には橋梁状把手が配され、これを基点に胴部にも同様の隆帯が垂下する。46は輪ゴム状に閉塞する独特の沈線文である。

49・50は加曽利Ｂ１式である。49は波状口縁の深鉢で、波頂部に横Ｓ字状の貼付文が付される。胴部には平行沈線文が描かれ、中段に「の」の字状の沈線文が描かれる。50は壺形土器の肩部であろう。

第９表　第９号住居跡石器一覧表

石　鏃

番号	出土状況	長　さ	幅	厚　さ	重　量	石　材	形　態	(長さ/幅)比	残存度
1	No　7	(15.5)	(15.5)	4.1	0.76	チ　ャ　ー　ト	A-1		②+④
2	No165	20.0	16.0	6.2	1.39	チ　ャ　ー　ト	A-2	1.2	①
3	一括	21.0	(14.0)	3.7	0.94	チ　ャ　ー　ト	A-1		④
4	一括	19.0	16.0	4.6	1.27	チ　ャ　ー　ト	A-1	1.1	①
5	一括	(14.5)	15.3	4.7	0.95	黒　曜　石	A-2		②

スクレイパー

番号	出土状況	長　さ	幅	厚　さ	重　量	石　材	形態Ⅰ	形態Ⅱ	残存度
1	張り方	55.5	58.5	19.4	59.35	チ　ャ　ー　ト	B-2	b-1	①

石　錐

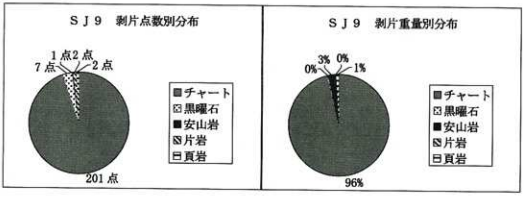
番号	出土状況	長　さ	幅	厚　さ	重　量	石　材	形　態	残存度
1	No165	30.5	9.5	6.0	1.58	チ　ャ　ー　ト	B	①

磨　石

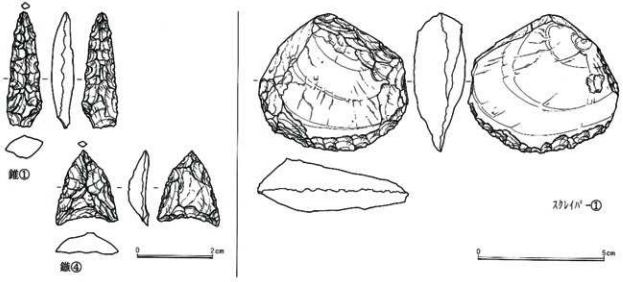
番号	出土状況	長　さ	幅	厚　さ	重　量	石　材	形　態	残存度
1	一括	66.5	45.5	32.5	133.19	安　山　岩	B-1	③
2	一括	85.0	45.5	40.3	225.01	安　山　岩	B-1	①
3	一括	109.5	100.0	52.0	831.58	花　崗　岩	A-1	①

凹　石

番号	出土状況	長　さ	幅	厚　さ	重　量	石　材	形態Ⅰ	形態Ⅱ	残存度	転用元
1	一括	125.5	80.5	31.5	432.94	砂　岩	B-2	b	①	磨石



第36図　第９号住居跡出土石器



第10号住居跡（第37図・第38図）

Ｅ－３グリッドに所在する。覆土上層に第２号列石が存在していた。

南壁が段丘斜面に掛かっており、全体のほぼ半分を土砂の崩落で失っている。また、西壁を土層確認用のトレンチによって失っている。

楕円形の竪穴住居跡であると思われ、残存部分の長径4.3mを測る。長軸方向はＮ－74.5°－Ｅを指す。残存部分の壁高は最大68cmを測る。

壁に沿って多量の礫が出土した。礫のサイズは10cm程度から人頭大までさまざまであり、大半は地山中の自然礫層に属するものとみられるが、一部人為的に改変を加えられているかもしれない。

覆土中から多量の礫が出土した。床面は起伏があり、西方向に緩やかに傾斜している。床面状に人為的に施された敷石は存在しない。

プランのほぼ中央と見られる位置に、長楕円形の石組みが検出された。焼土は検出されていないが、石囲炉の可能性がある。石組みの長径は90cm、短径は42cmを測る。

壁周辺から５本のピットが検出された。各々の規模は別表の通りである。

遺物は覆土下層を中心として、加曽利Ｂ１式の土器が出土している。

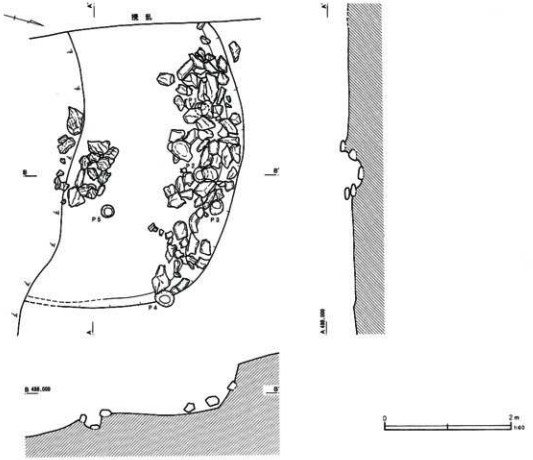
出土遺物（第39図・第40図）

１はほぼ完形の小型深鉢である。底部から胴上半部にかけてほぼ直線的に開き、口縁内屈する。口端上に横Ｂ字形の突起が４単位配される。口縁直下には扁平な隆帯が貼りつけられ、へら状工具による斜位の刻みが施される。

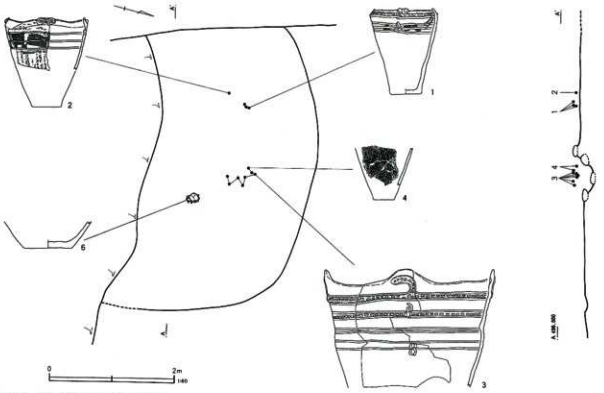
第10表　第10号住居跡柱穴一覧表

柱穴番号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５
口径(cm)	22	25	24	30	22
深さ(cm)	13.5	27.5	26.6	39	26.2

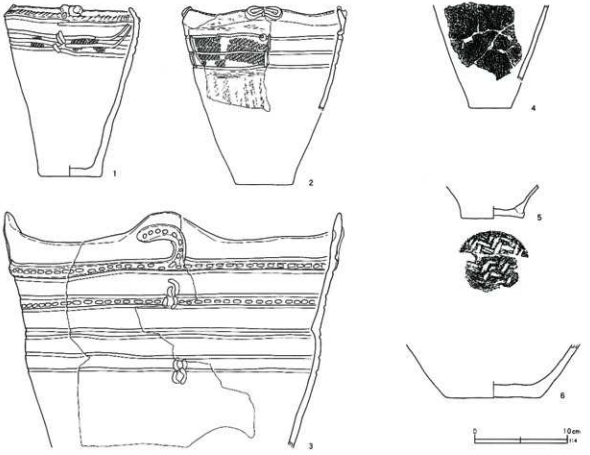
第37図　第10号住居跡



第38図　第10号住居跡遺物分布図



第39図　第10号住居跡出土土器



第11表　第10号住居跡石器一覧表

石　鏃

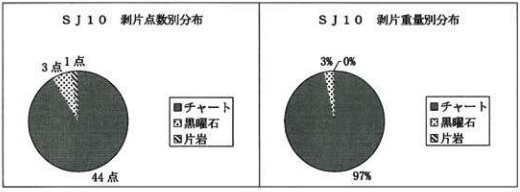
番号	出土状況	長　さ	幅	厚　さ	重　量	石　材	形　態	(長さ/幅)比	残存度
1	一括	17.0	15.5	4.7	0.99	チャート	A-2	1.1	④

石　錘

番号	出土状況	長　さ	幅	厚　さ	重　量	石　材	形態Ⅰ	形態Ⅱ	残存度
1	№1	36.5	32.0	11.3	21.13	スレート	A	a	①
2	№16	42.0	29.0	12.3	22.12	片岩	A	a	①

磨　石

番号	出土状況	長　さ	幅	厚　さ	重　量	石　材	形　態	残存度
1	一括	82.5	65.5	51.3	356.70	花崗岩	A-1	①



胴上半部に３本の平行沈線が巡り、ノの字状の短沈線によって上下に連結される。沈線間にＬＲ単節横位回転の縄文が、ごく疎らに施文される。

口径12.4cm、最大径14.5cm、器高18.1cmを測る。

２も比較的小型の深鉢で、胴部中段から口縁にかけて残存する。

胴上半部に向けてやや内湾しつつ開き、口縁内屈して内面に段を形成、この部分に沈線が巡る。口端上に結紐状の貼付文が４単位配される。胴上半部に３本の沈線が巡り、上下を短沈線により連結、沈線間にＬＲ単節横位回転の縄文が施文される点は１の個体と同様である。

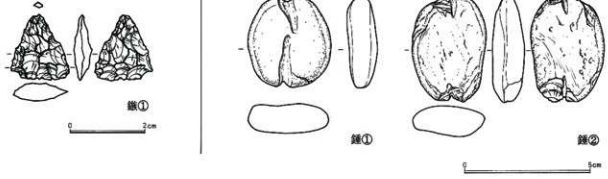
３は大型の深鉢である。胴部中段にくびれを有する。

口縁下に幅広の列点を伴う隆帯が巡る。４単位の波状口縁を成し、波頂部直下には、ひれ状の貼付文が付される。

胴部は平行沈線により多段に分帯され、間隙に対弧状の短沈線が描かれる。縄文は施文されない。

４以下は無文の胴下半部である。

第40図　第10号住居跡出土石器



第12号住居跡（第41図）

G－4・5、H－4・5グリッドに所在する。南半および西壁の一部を斜面の崩落で失っている。

円形の敷石住居跡である。2軒の切り合いが確認でき、内側を第12A号、外側を第12B号と呼称した。本来は出入り口の張り出しを持ついわゆる柄鏡形敷石住居跡であったものと考えられる。主軸方向・規模は不明、壁の立ち上がりもほとんど残っていない。

配石は縁石と床面敷石の区別のはっきりしたスタイルで、今回調査された他の敷石住居と異なった構造が指摘できる。

遺物は、堀之内1式を中心とした土器片が出土した。いずれも小破片であったが、第1遺物包含層は本住居跡に接して形成されており、出土遺物の時期から見ても、主として本住居跡の住人により形成されたものである可能性が高い。

なお、第12B号の縁石には、第43図の大型石棒が転用されていた。

出土遺物（第42図・第43図）

1～4・6は後期初頭における加曽利E系の土器である。5は南関東にみられる曽利系の土器である。

39は地文条痕文の称名寺式である。7～8は列点施文の、いわゆる称名寺II式である。

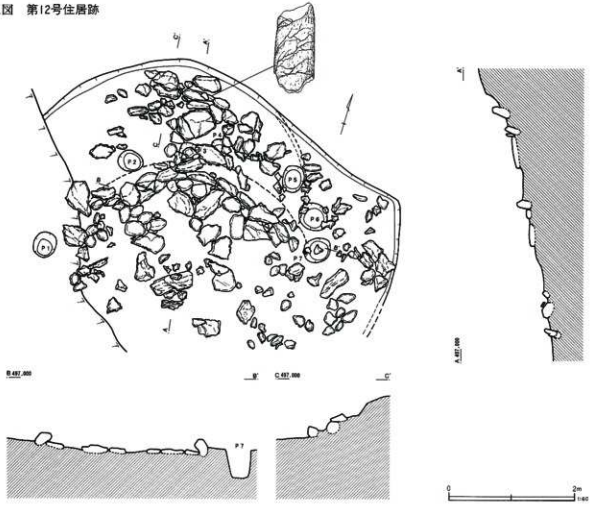
12～30は堀之内1式である。14・15・17～22・24は、口縁部文様帯を持ち、頸部に幅広の無文帯を有する深鉢である。23・25は胴部に集合沈線文が描かれる。

31～36は堀之内2式である。

第12表　第12号住居跡柱穴一覧表

柱穴番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
口径(cm)	40	40	36	42	42	48	46
深さ(cm)	38.8	25.3	29.4	34.6	36	37.9	34.5

第41図　第12号住居跡



第42図　第12号住居跡出土土器

第13表　第12号住居跡石器一覧表

石 鏃

番号	出土状況	長 さ	幅	厚 さ	重 量	石 材	形 態	残存度
1	一 括	(25.5)	(19.0)	5.5	1.91	チ ャ ー ト	A	②

石 錐

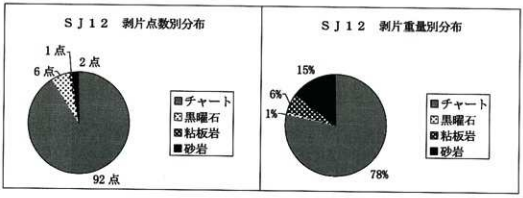
番号	出土状況	長 さ	幅	厚 さ	重 量	石 材	形態Ⅰ	形態Ⅱ	残存度
1	一 括	56.0	44.0	16.8	56.97	砂 岩	A	a	①

石 棒

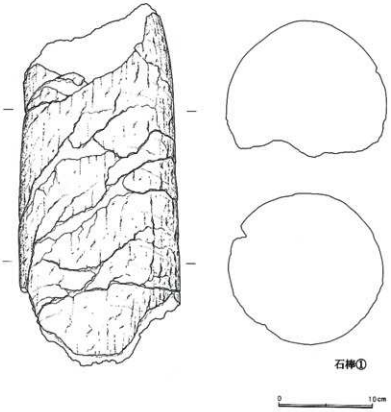
番号	出土状況	長 さ	幅	厚 さ	重 量	石 材	断面形	残存度
1	№24	(377.0)	169.0	(170.0)	17670.00	凝 灰 岩	円 形	③

凹 石

番号	出土状況	長 さ	幅	厚 さ	重 量	石 材	形態Ⅰ	形態Ⅱ	残存度	転用元
1	一 括	134.5	69.5	39.0	421.27	砂 岩	B-2	a	③	—



第43図　第12号住居跡出土石器



(2) 石棺墓

A．第１石棺墓群（第44図）

D－3・E－3グリッドに所在する。第９号住居跡の床面直上に構築されており、住居廃絶後の平坦地を墓域に転用した、一種の廃屋墓というべきものである。

石棺墓は、重複するものを含め、４基が検出された。いずれも第９号住居跡の床面内陣と呼んだ内周部分をほとんど逸脱することなく、むしろその配石を部分的に利用するような状態で構築されている。

床面敷石と石棺墓の構築面が一致していることからも、住居の廃絶からほとんど時間をおかずに墓域としての利用が開始されたことは明らかである。

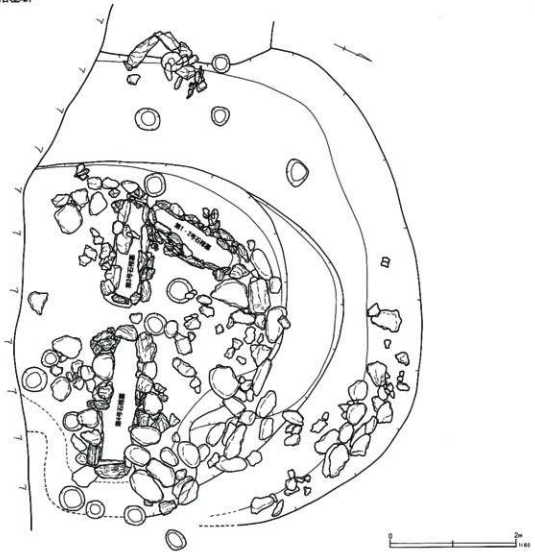
調査時の観察所見に基づいた、石棺墓の新旧関係は、以下の通りである。

＊第１号・２号石棺墓は重複関係にあり、第２号は東壁の一部を除き、第１号の掘り方をほとんど再利用するようなかたちで構築されている。

＊第３号石棺墓は、第１号石棺墓の南壁を切って構築されている。

＊第４号石棺墓は、他の３基と直接の切り合い関係にないが、蓋石の残存状態が完全であり、新たな埋葬行為の際に、既存の石棺墓の蓋石を再利用して石棺墓を構築しているものとするなら、本石棺墓群中最も新しいと考えることができる。

第44図　第１石棺墓群



第１・２号石棺墓（第45図・第46図）

旧称ＳＸ７・８である。第９号住居跡内陣、西縁辺の縁石に沿って構築される。配石外縁部分の長径1.92ｍ、短径0.78ｍ、埋葬主体部内の長径1.61ｍ、短径0.47ｍを測る。壁高は最大69cmを測る。主軸方向はＮ－15°－Ｅを指す。

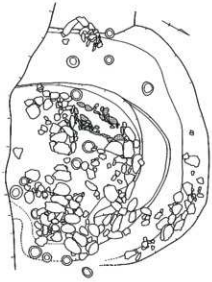
長方形プランの両側縁に片岩製の板石を小口立てにし、上端に板状の石材を平置きにする。短軸側の側石は存在せず、底石・蓋石とも存在しない。

東壁の南よりの部分は、一旦片岩製板石により壁を構築し、その後扁平な川原石を用いて壁を造りなおした二重の構造になっている。二つの壁の間隙は小礫で塡められている。両者のうち石棺墓本体の軸方向に整合するのは、後者、川原石の壁である。

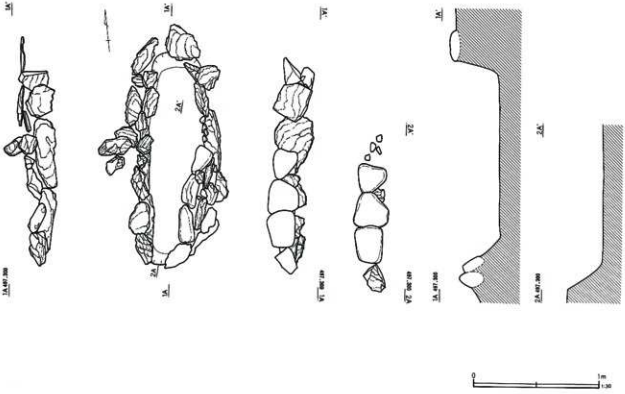
以上の所見から、２基の石棺墓の切り合いと考え、現存のものを第２号石棺墓、それ以前に存在したであろうものを第１号石棺墓と呼称する。両者はほぼ掘り方を共有しているが、第2号の主軸方向は若干東に振れるものと考えられる。

埋蔵主体部に遺物は伴わず、掘り方から若干の土器小破片が出土した。

第45図　第１・２号石棺墓の位置



第46図　第１・２号石棺墓



第３号石棺墓（第47図・第49図）

旧称ＳＸ９である。第９号住居跡内陣の、主軸線上西端に位置している。第１・２号石棺墓を切る。

配石外縁部分の長径1.95m、短径1.01m、埋葬主体部内の長径1.57m、短径0.6mを測る。壁高は最大45cmを測る。主軸方向はＮ－73°－Ｅを指す。

長方形プランの両側縁に大型の川原石を置き並べ、上端に板状の石材を平置きにする。短軸側の側石は板状の川原石を小口立てにし、上端に板状の石材を平置きにする。

蓋石は板状の準片岩でモザイク状に閉塞される。西半分が失われているのは、第４号石棺墓への石材の転用によるものか。底石は存在しない。

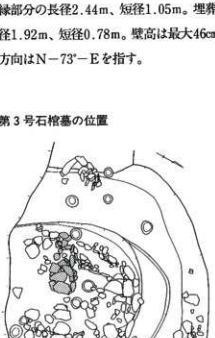
遺物は出土しなかった。

第４号石棺墓（第48図・第50図）

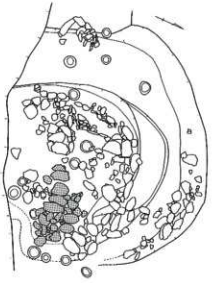
旧称ＳＸ10である。第９号住居跡内陣の、主軸線上東端に位置している。他の石棺墓と直接の切り合い関係にないが前述の理由から、墓群中もっとも新しい石棺墓である可能性が高い。

配石外縁部分の長径2.44m、短径1.05m。埋葬主体部内の長径1.92m、短径0.78m。壁高は最大46cmを測る。主軸方向はＮ－73°－Ｅを指す。

第47図　第３号石棺墓の位置



第48図　第４号石棺墓の位置



長方形プランの両側縁に、片岩や扁平な川原石を布積みにして、ほぼ垂直に近い壁面を形成している。壁の上端には、これに直交して、扁平な石材が平積みにされている。

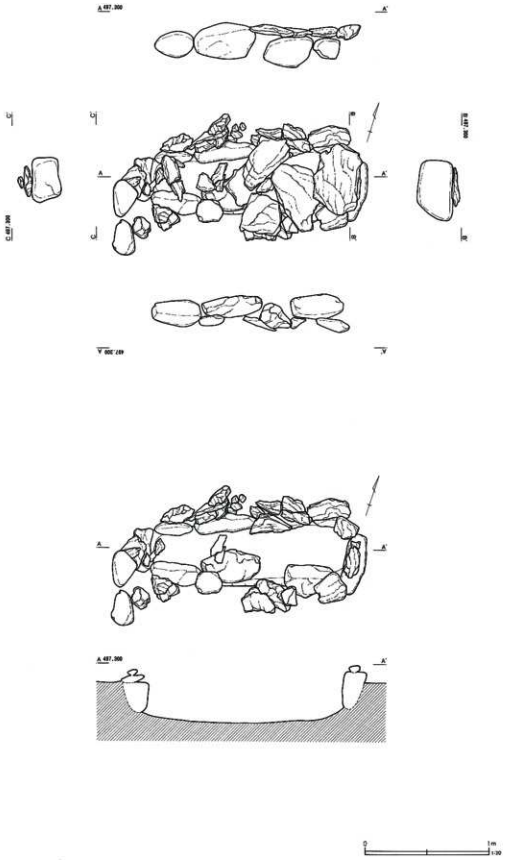
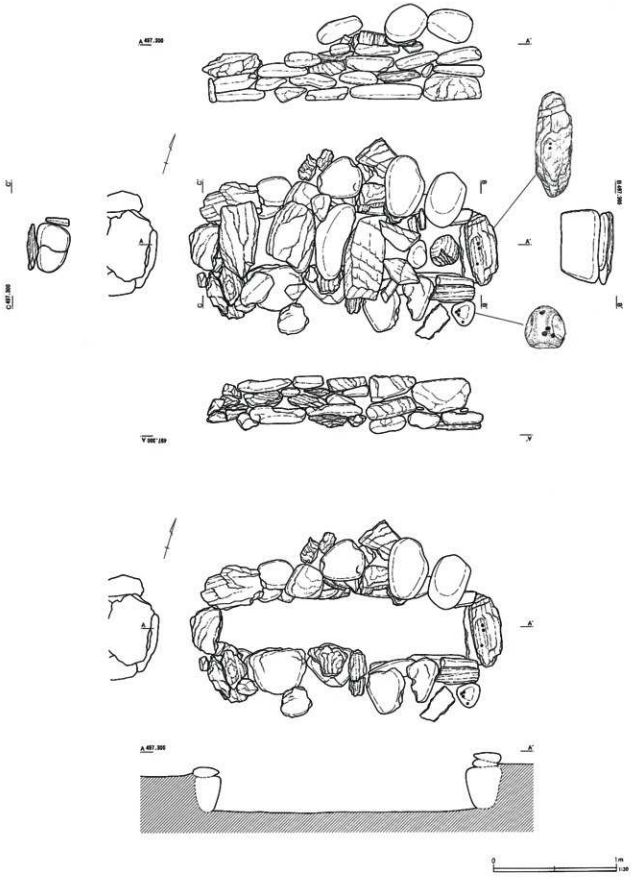
短軸側は大振りの川原石を小口立てにし、上端に扁平な石材を１段から２段、平積みにしている。北西のコーナーには、棒状の石材が石柱様に立てられている。

蓋石は東端の一部を除き、ほぼ完全に残存している。長方形ないし長楕円形の石材を、主軸に直交して川の字に並べたもので、かならずしも片岩などの扁平な石材にこだわらず、長径１ｍあまりの川原石なども使用されている。

第50図には収まっていないが、北側に本石棺墓の蓋石から延長する大掛かりな配石がみられる。この部分の配石は、第９号住居跡床面から浮いており、石材撤去後の下面精査で、住居跡の縁石の一部が検出されていることから、廃屋墓として再利用する過程であらたに構築された部分であることが伺われる。

縁石の一部として凹石２点が使用されていた。また、覆土を全量サンプリングし、水洗選別を行った結果、石鏃10点、石錐１点等が発見された。

第49図　第３号石棺墓



第50図　第４号石棺墓